

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

—— 切腹状況における特異性の分析・検討ならびに
切腹の公示罪状と切腹原因の真相解明に向けて ——

福 井 幸 男

キーワード：千利休，茶道，切腹の原因，豊臣秀吉，朝鮮出兵

I はじめに

本紀要第40号（2011.3.30.発行）における，標記標題の拙稿（以下「前稿」と記す。）で，千利休（以下単に「利休」と記す。）の切腹の状況および原因に関する関係史料の分析・検討を行った。また，切腹の原因に関する先行研究の諸説についても，批判的検討を加えた。その中で，切腹の状況については，関係史料の記述から，切腹状況項目を抽出・分類し，各項目毎の特徴や，原典史料成立時代および著述者区分別の特徴などについて分析・検討した。その結果，利休の切腹には通常の切腹にはみられない，極めて異質な特異事象が多々みられることが判明した。それらについては前稿ですでに記述したが，今後の論の展開上重要なポイントであり，下記により再度確認しておきたい。

利休切腹の状況における特異事象項目

- A. 大徳寺三門楼上への利休木像安置と安置問題発生 of 的時的ずれ
- B. 利休切腹直前の利休木像の磔と切腹罪状の事前公示
- C. 切腹直前の利休屋敷の嚴重警固
- D. 茶室の床に腰を掛けて腹を十文字に切って腸を取り出し，それをひる鉤に掛け終わった後，利休の合図により介錯する
- E. 菅丞相に擬えた狂歌をのこしての切腹
- F. 切腹でありながらの獄門

G. 本人の木像の足で踏みつけた獄門

H. 一條戻橋における利休木像の礎と獄門

これら多くの特異事象についての分析・検討・解明が、利休切腹の真相解明の核心であることもまた、前稿で述べたとおりである。

そこで本稿では、まずこれらの切腹状況における特異事象について、個々に分析・検討を進めていくこととするが、上記のごとく8項目におよび、また概ね発生順に列挙したものであるため、関連事象を一括りとして、まとめて行うのが効果的と思われる。このため一部統合し、かつその表現についても簡潔にして、切腹状況における特異性として、下記のように4項目に分類し、検討することとする。(なお、上記の特異事象項目のうちDおよびEについては、前稿ですでに検討を加えていることもあり、ここでの特異性項目としては省略した。)

利休切腹の状況における特異性分類項目

1. 木像安置と問題発生の時期的ずれ(特異事象項目A)
2. 処断当局による利休切腹処置にみる特異性(同B・F・G)
3. 切腹直前の利休屋敷の嚴重警固(同C)
4. 一條戻橋における木像礎と獄門(同H)

また前稿では、切腹原因についても同様に、関係史料の記述から、切腹原因項目を抽出・分類し、各項目別の特徴や、原典史料成立時代および著述者区分別の特徴について、分析・検討した。そしてその結果については、前稿にその概要を示したとおりである。したがって本稿においては、上記切腹状況における特異性分類4項目の分析・検討を行うとともに、切腹原因に関する関係史料の分析・検討結果も踏まえながら、利休切腹の公示罪状と切腹原因の真相解明にむけての論考をすすめることとしたい。(なお、本稿で引用する史料においては、原文にある返り点は省略し、また行間の送り仮名およびルビも不必要と思われるものは省いた。)

Ⅱ 利休切腹の状況における特異性分類項目毎の分析・検討

第1節 木像安置と問題発生の時期的ずれ

利休が大徳寺三門を改築寄進し、その落慶法要が行われたのは、天正17年（1589）12月5日のことであった。そして三門楼上に安置された利休木像が問題となるのは、天正19年閏正月20日頃とされる。その間には実に、1年2ヶ月半の時間差がある。つまり利休は古証文によって過去の罪を暴かれ、切腹させられたことになるのであり、この時期的ずれという点そのものが、木像安置が利休処罰の単なる口実であったことの何よりの証左であろう。ただ、この時期的ずれという点に関しては、何人かの先行研究者も述べているが、その論拠については、単なる時期的ずれの指摘か、あるいは木像安置時期を問題発生の直前と推測するにとどまって、本格的に論考されたものはない。

本節ではこの点について、一步掘り下げて考察してみることとするが、それに関連して重要なことは、大徳寺三門大改築そのものが、どのようになされたのかということである。つまり、事前届出などをしたうえで、監督当局の管理下でなされたのか否かといったことである。そこでその前提として、まず利休寄進による大徳寺三門大改築の事前届出について検討する。

1. 利休寄進による大徳寺三門大改築の事前届出について

1) 利休による三門改築の事前届出の記録

前稿18頁の〈史料Ⅲ-2〉『武功夜話』第三巻により、利休が大徳寺三門改築寄進について、事前に秀吉に願い出て、了解済みであると言っていた、と記されていることについては、すでにみてきたところである。しかしこのことは重要な点であるので、若干その前後の記述も含めて再度ここに載せることにする。（アンダーラインは筆者による）

（前略）二つには龍殿の事 豊松君殿和子誕生に付き上下一和と為さざる事、又一つには奥州仕置き利休の事の事、先日宗易殿見舞い下され候の時、老婆心ながら案じ入り候の事、すなわち大徳寺三門を御寄進に付き、宗易殿万々ぬかりなく、殿下にもその由を願い出で御済了の如くに承り候ところ、家来の注進によるに殿下不快の由。（後略）

（前略）なを聚光院三門^リ寄進の件、宗易殿聊かも他意なく取り計り候事、聚光院は納屋衆の

先祖代々の菩提寺に候に付、御寺の御願もあるにより一心発起の寄進にて、これも兼ねて作事方を関白殿下にも御談候の上取り懸るところ、此度の種々物議の取沙汰に付き、宗易殿も関白殿下に直々此度の三門寄進の顚末等、身分不相応の儀重々御詫言申し上げ、不調法仕り候事御弁解候ところ、殿下も御聞済なされ候由、向後別段の事相無くばとそれがしも心中ひそかに痛心致し居り候²⁾

このように利休は三門寄進について、事前に関白に届出済であり、事後に物議の取沙汰があった後も、殿下に直々に身分不相応であったとして、重々詫びを申し上げ、殿下もお聞き済みであったとの記述である。

以上にみるごとく、利休がその三門樓上に問題の木像を安置したとされる、大徳寺の三門の大改築そのこと自体については、事前に届出を行い許可を取っていたことになるが、こうした記述は唯一本史料のみである。そこで今回は、その信憑性の確認の意味も含めて、別の角度から、このような大造営については、少なくとも当時の京都においては当然のこととして、事前届出と許可が必要とされていたのではないかという視点から、少し歴史を振り返りつつ検討してみたい。

2) 鎌倉幕府法および分国法における寺社造営修理等の規定

[鎌倉幕府法]

<史料Ⅱ-1>「御成敗式目」第一条、第二条、貞永元年（1232）8月執権北條泰時制定³⁾。

御成敗式目

一 可修理神社専祭記事

（前略）兼又至有封社者任代々符小破之時且加修理若及大破言上子細随于其左右可有其沙汰矣

一 可修造寺塔勤行仏事等事

右寺社雖異崇敬是同仍修造之功恒例之勤宜准先條（後略）

以上のごとく、幕府法の冒頭に寺社の造営や大修理は、事前に届出すべきことが規定されている。この式目は勿論鎌倉幕府法として室町時代に至るまで、武家の根本法とされたものである。しかしその後、戦国大名たちは幕府の統治から離れ、独自の分国法を制定するようになるが、それらの分国法の

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

中にも、御成敗式目の第一条、第二条の思想を取り入れているものもあるもので、紙数の関係もありその若干の事例を示すと次のとおりである。

[分国法]

＜史料Ⅱ-2＞「塵芥集」（伊達家法）第三条，天文5年（1536）4月制定⁴⁾。

- 一 さうゑい（造営）の事、じんりやう（神領）をふさけ候ハ、へつたうかんぬし（別当神主）しゆりをなすへし、ふさたにいたつてハ、はやくかのしよくをあらためかへへし、たゝ（大破）したい（時宜）はのときハ、しきによるへし、若又しんりやうなくは、そのやしろのへつたうかんぬしのやくとして、くわんしん（勲進）をもつてしゆりをなすへし、なを事ならずハ、しさい（披露）をひろう（舎力）のうへ、かうりよく有へき也、

＜史料Ⅱ-3＞「六角氏式目」第一条，永禄10年（1567）4月制定⁵⁾。

- 一 於神社仏寺之訴訟者、早被聞召入、祭礼修理興隆并社領寺務等、速可被仰付事、

＜史料Ⅱ-4＞「吉川氏法度」第四十八条，元和3年（1617）4月制定⁶⁾。

- 一 寺社路橋渡船并手堤等損候者、其下代肝煎罷出、可調儀候、不罩了簡候者、可相伺之事、

上記のごとく、多少その濃淡に差はあるものの、分国法の中にも、御成敗式目ほどではないが、その考え方を残しているものがあることが判る。

3) 豊臣政権の天正17年当時の洛中管理と大徳寺三門大改築

天正13年7月関白に叙任された秀吉は、畿内はもとより中国・四国・北陸を平定し、徳川家康も屈服させて、天正15年には九州南端にいたるまでの制覇を完了する。そして翌16年4月には、朝廷支配の拠点ともいえる聚楽第に、後陽成天皇の行幸を迎える。そして更に次なる目標である東国および陸奥・出羽の制覇に向けて着々と準備を進めていた。

ちょうどその時期に当たる天正17年当時の京都には、公家のトップとしての関白の政庁である聚楽第が置かれていたのであるから、京都は豊臣政権にとっては、大坂と並ぶ最重要の直轄領であった。このため秀吉は最も信頼する部下の一人である前田玄以を所司代として配置し、彼に細心の注意をもって管理させていた。したがって豊臣政権による洛中の統治は、諸大名の領内に比べて、たとえそれらが秀吉の支配下にあるとはいえ、全く次元を異にする統治がなされていたものと思われる。つまり、寺社の造営・修理その他の

建築物・構築物の新增設・大修理には、事前届出・許可が必須であったものと考えられる。

こうした状況下における洛中で、しかも聚楽第にすぐ近い大徳寺において、事前届出無しに、その三門の大改築が可能であったとは、とても考えられないのではないだろうか。即ち前稿 28 頁の〈史料Ⅱ-6〉において示した、『北野社家日記』に記されている事例が、たとえそれがお土居囲い関連だったとしても、所司代前田玄以による再三にわたる検分の状況からみて、利休寄進による本件工事についても逐一検分し、その竣工に至っては、落慶法要にも臨席していたと考えるのが合理的ではないだろうか。

2. 木像安置時期の特定

次に木像安置の時期の特定について検討するが、それに関する記録があるのかと問われると、否と答えるしかなく、そのためにこの論は否定されるかもしれない。しかし、一般的に考えて、大徳寺長老衆は利休の三門改築という大功績を顕彰し、それを後世に伝えるために、大徳寺側の主導で貢献者の木像をつくり安置したものとするのが、前稿 19～20 頁の〈史料Ⅲ-8・9・13〉などの記述から見ても自然であり、かつ合理的ではないだろうか。ただこれらの史料の記述が、大徳寺古溪宗陳と相議したとなっているのは、この記述そのものが、利休を主人公としているためで、寺側の主導で木像は造られたが、その像の姿や仕様などについて、利休と相談したという意味であろう。でなければ、たとえ仮に利休が不遜・僭上であったとしても、古溪宗陳の禅語録「蒲庵稿」に、利休について「三十年飽參之徒」とまで記され、また自らも敬愛してやまなかった師の古溪に対して、自分の方から、己の木像を造って三門楼上に安置し、後世に自分の功績を伝えて欲しい、と要望した事になるのではないか。それはあり得ないとするのが妥当ではないか。

したがって木像安置時期については、三門落慶法要時に除幕披露のうえ、安置されたと考えるべきであろう。そして当然その落慶法要のとき、木像安置は当局者に知られていたと考えられる。なぜなら三門楼上は密室であり、いったん安置してしまえば、それ以後は決して人目に立つことはなく、特定

の大徳寺関係者以外には知られることもないからである。むしろ落慶法要には、前述したとおり、監督官庁長官である京都所司代の前田玄以も臨席しており、木像が安置されるのを目撃していた、と考えるほうが自然である。ということは、また同時に上記で示した前稿＜史料Ⅲ-2＞の、「大徳寺三門を御寄進に付き、宗易殿万々ぬかりなく、殿下にもその由を願ひ出で御済了の如くに承り候ところ。」という記述は事実であり、その後天正19年2月初めになり、秀吉が翻意したことを証明することになるのではないか。

いずれにしても、三門落慶法要の1年2ヶ月半も経った後に、その大改築の功績をたたえて、功労者の木像を安置することなど、ありえないことである。したがって古証文を突きつけての処罰であることにかわりないのである。だからこそ江戸時代の利休と何らかの接点を持つ人たちは、木像安置事件などではなく、利休娘の一件が原因だったのではないかと、讒言によるものだとかいった推測による記録を残したのであろう（後記第5節参照）。

ここで問題とすべきは、何故1年以上も昔の古証文を、この時に至って持ち出してまで、そしてまた、秀吉に翻意させてまで、利休を処断したのかという点であるが、この点については後述する。

第2節 処断当局による利休切腹処置にみる特異性

この特異性の内容について検討する前に、まず驚かされるのは次のことである。即ち、たとえ天下一の茶湯名人とはいえ、一茶人である利休が時の天下様である関白秀吉から、切腹という形で死を賜る、という安土桃山時代の単なる一事件が、本節、および後記第3節に示す切腹直前の利休屋敷の厳重警固などという、特異事象を伴っているということ自体が特異であるということであり、このことをまず最初に指摘しておきたい。（なお本節の特異性に関して、本格的究明に取り組んだ先行研究には、管見による限り接していないことを付記しておく。）

1. 本特異性演出の必要性

ところで本件特異性には、前記特異事象項目で挙げた3つの要素がある。つまり、利休切腹直前の利休木像の磔と切腹罪状の事前公示、切腹でありながらの獄門、そして本人の木像の足で踏みつけた獄門である。これら3つの

要素は、いずれも関連した一連のものであることが一見してわかり、そしてこれらの特異事象項目を結ぶキーワードは何かというと、それは「利休木像」と、そして「磔・獄門」であることに気づかされる。つまりその意味するところは、利休は賤輩凡夫たることも顧みず、天子や院も行幸し親王摂家も通り給う三門楼上に、己の木像を置き、その足で貴人たちの頭を踏ませるなどという、不礼・不義を働いたことは言語道断であり、磔・獄門に処す、ということである。つまり木像磔の傍らに立てた高札の罪状公示の内、その首罪である三門楼上木像安置不敬罪による処断の、事前および事後の、演出を凝らしたパフォーマンスである。そしてそれは当時の史料の記述を裏づけるものでもある。これは一口に言うなら、罪科の事前告示およびその処断・刑執行方法の予告と、その結果の誇大公示である。

しかもそのやり方が、前代未聞といわれた、木像の磔という視覚効果十分の、罪状および刑執行方法の予告という事前顕示であったこと、切腹にも拘らず前例のないと思われるような獄門であったこと、さらにその問題とされた木像の足で踏みつけさせるという、常軌を逸したとしか言いようのない異様な光景まで現出させての獄門、などという特異事象を伴ったものであったということである。

これらの特異事象をよく考えてみると、事前の木像の磔は、この橋で獄門にするという予告であったと考えられるところから、はじめからこの橋で獄門にする必要があったと考えるべきではないかと思われる。つまり、利休をこの橋で、しかも切腹でありながら獄門にする必要がどうしてもあった。そのために獄門に処すに相応しい口実として、言語道断の不礼・不義の象徴としての、大徳寺三門安置の木像が必要であった、ということになるのではないだろうか。このように考えると、木像の足で踏みつけさせるという、常軌を逸したと思われる、手の込んだ獄門のやり方の意味が理解できるのではないか。単なる獄門では、切腹でありながら獄門に処すという理由が立たないからであろう。すると次には、ではいったい、この橋で利休を獄門に晒さなければならなかった理由とは何であったのか、と言う問題を考えなければな

らないことになるが、この点については後述することとする。

2. 切腹でありながらの獄門

この特異性を考えるまえに、われわれの知る一般的な切腹のあり方は、どういうものであったのか、ここでちょっと振り返ってみたい。切腹させるに相応した罪科であっても、それを高札により衆人にしかも事前に、そして強烈に印象づける視覚効果を意図した演出で、告示するであろうか。さらに切腹後にはその視覚効果をより一層高める工夫・細工を施しての梟首などするであろうか。その答えは否としか言いようがない。

そこで、こうした切腹後の獄門といった特異事象について、調査する必要が生じた。神宮司序編『古事類苑』の「法律部十八」（安土桃山時代より前）の「切腹」，「梟首」の項や，「法律部三十三」（江戸時代）の「切腹」，「法律部三十四」（同）の「梟首」の項に収載された過去の事例，ならびに石井良助著『日本刑事法史』創文社刊や，佐々波與佐次郎著『続日本刑事法制史』有斐閣刊などによる限り，こうした事例は見ないことである。

ここまで検討してみると，これら一連の特異事象を執り行った処断当局の意図は明白となるであろう。即ち，己の木像をつくらせ，大徳寺三門楼上に安置させることが，いかに不礼・不義の所行であるか，ということの執拗極まりない，強調・顕示の必要性の意味するところは，次の二つのことである。つまり，一つには利休処断の正当性の強調ということである。ところが，このあまりにも誇大な顕示が，結果的には逆に，罪状そのものに対する疑念を抱かせることになるのである。そしてもう一つは，そこまでしてこの橋で獄門に晒さなければならなかった真の理由・狙いが，その誇大顕示の裏には隠されていたということではないか。ならば真の狙い・理由は何かということになるが，それについては後述することとする。

ところで，切腹後の獄門という特異事象であるが，そうした前例は前記の調査ではなかったと記したが，秀吉がなぜこのような処置をとったのか，どうにも腑に落ちないところがあった。そこで，鎌倉・室町などの過去の前例でなく，また，武士道云々について論じられるようになる江戸時代でもない，

利休切腹の当時、つまり、秀吉治世の直近過去に、焦点を絞って仔細に点検することにした。その結果、驚くべきことに、利休切腹のわずか8ヶ月余りに、その前例があったのである。しかもその処置は、同じ秀吉により前年に行われた、関東平定における小田原北條氏に対するものであった。利休の切腹後の獄門は、北條氏の前例に倣ったものとも言えるので、ここで北條氏の事例を検討することで、本件特異性検討の一助としたい。

関白秀吉による、小田原北條氏の氏政・氏照兄弟に対する、切腹および切腹後の獄門命令の事例を、東京大学史料編纂所編『史料総覧』巻十二、によってまず見ることにする⁷⁾。

- ・ 天正 18 年 7 月 5 日 北條氏直、相模小田原城ヲ出デ、羽柴雄利、黒田孝高ニ頼リ、自殺シテ父氏政以下ノ死ヲ宥サンコトヲ秀吉ニ請フ、秀吉、之ニ感ジ、其死ヲ宥シ、氏政、同氏照及ビ老臣大道寺政繁、松田憲秀ニ自殺ヲ命ズ、
- ・ 同年同月 11 日 秀吉、北條氏政及び弟同氏照ヲ田村安清ノ家ニ自殺セシム、
- ・ 同年同月 16 日 秀吉、北條氏政、同氏照ノ首級ヲ京都一條戻橋ニ梟セシム、

これを史料により確認すると、次のとおりである。

<史料Ⅱ-5>「北條五代記」巻之十⁸⁾。

六 氏直没落の事

(前略) 氏政切腹の旨使者を立られおはんぬ力およはす本城を下り医師安栖か室に移り給ひぬ
檢使として石川備前守佐々淡路守前田權之助榊原式部大夫参集す同月十一日氏政切腹舎弟美濃
守氏親かい志やくし其剣先をすてす自害せんとする所に警固の武士血剣をうはひ取命を助るあ
はれなりける次第也同日陸奥守氏照も切腹し給ひぬ(後略)

<史料Ⅱ-6>奈良興福寺多聞院記録『多聞院日記』巻三十六、天正 18 年 7 月 10 日の条⁹⁾。

- 一 相州小田原ノ城去四日ニ落居之由、大納言殿へ昨夜関白殿ヨリ御朱印来、必定々々ト也、
様子ハ不聞ト、浅猿々々、珍重々々、当屋形ハ氏直ト云、其父氏^(殿)正ト云、氏直ノ弟陸奥
守ト云二人人生¹⁰⁾、

<史料Ⅱ-7>川角三郎右衛門「川角太閤記」巻四¹¹⁾。

- 一 七月十二日氏政切腹に候氏直ハ高野へ御入候とて大坂にて疱瘡被成御果候氏政類ハ京都へ
御上被成堀川通戻橋に被成御掛候¹²⁾(後略)

<史料Ⅱ-8>小瀬甫庵『(甫庵)太閤記』巻十二¹³⁾。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

○ 氏政氏照兄弟切腹之事

（前略）然るにより十日之晩¹⁴、石川備前守・^{マヒ}蒔田權^{ノスケ}佐・中江式部大輔・佐々淡路守・堀田若狭守、家康卿より榊原式部大輔検使として、安清軒^{タク}が宅に來り、其有増^{そのあらまし いひいだ}を云出さん^{イタ}も痛はしく思ひ侍りし^{しめスイサツせ}躰を、氏照令^{イトマ}推察^{いとま}行水之暇^{いとま}を芳情あれよといはれしかば、いかにも緩々と御文なども調られ候やうにと何れも申けり。（中略）如此侍りて、切腹之形勢^{カクノ}さずが北条家代々相統^{サウゾク}有ししるしかなと思はれて、殊勝にも思はれ、又誰も衰^{アライサマ}に成んをば兼て知たき物にこそあれと、^{メイジ}銘^{アヒ}心^{いづ}腑^ふけり。兩人之面を秀吉公へ家康卿御持参有しかば、不^ヲ恐^{トロ}天命者^ヘの事なれば、洛之戻橋に掛置可申旨、石田治部少輔に被仰付にけり。（後略）

＜史料Ⅱ－9＞権大納言勸修寺晴豊日記「晴豊記」第六卷、天正18年7月16日の条¹⁵。

十六日 天晴、北條首おと、むつのかミ首のぼり申候、関白より書状、菊亭余中山三人あて所披露申候、則返事申候、首かかり申候、見物出かへりにからす丸所にて大酒也

以上の史料により、北條兄弟が切腹後洛中の一條戻橋で獄門に梟された史実が確認できるのである。

3. 豊臣秀吉による切腹後獄門の意味

このように、切腹後に獄門にするという事例は、管見によれば秀吉による上記の北條氏政・氏照の場合と、その翌年の利休の場合以外には見当たらず、その意味でも、この二つの事例はやはり特異であると言わざるを得ない。

そこでここでは、こうした事象そのものが他に例を見ないが故に特異であるということのほかに、その特異性の根拠について考えてみたい。

北條兄弟の切腹は上記『史料総覧』の引用でも記したとおり、当初北條家当主氏直が自らの切腹をもって、父氏政以下の死を宥すよう秀吉に懇請したのに対して、氏直が徳川家康の二女を妻としていることに秀吉が配慮したのであろうか、その罪を宥し代えてこの両名および重臣2名の切腹を命じたものである。つまり戦国の世における、信濃の諏訪頼重が武田信玄に対し、開城と自らの切腹を和議の条件として認められた例にみられる、敗将が自ら切腹してその部下の生命を助けようとしたケースに相当する。一方の利休の切腹は、真の理由は別にして、表向きには刑罰の切腹であったといえるであろう。しかしながら、いずれにしても、もともとこの刑は武門の刑で、武士た

る者に斬首の詬辱を免れしめるためのものであるから、利休は武士ではないが、その功績により武士並みの切腹を命じたのであり、切腹後獄門にするというのは特異であり、またそれ以前も以後も含めて、秀吉のみがそれを命じたという意味においても、特異であると言わざるを得ない。

つまり、北條氏の場合、もし獄門にされることがあらかじめ判っておれば、臣下としては一命を賭して、全員討死覚悟で戦わざるを得ず、その結果秀吉方にも多大な犠牲を強いられることになったであろう。しかし、領主が城兵に代わって自らの命を捨て、それに対して切腹という武士らしい死を認められたことで、小田原城および全支城を明け渡し降伏したのである。ところが秀吉は、北條氏が開城・降伏さえすれば、その後は獄門にすることで、今後の見せしめにしたのである。また一方の利休の場合も、その切腹が外面的・形式的には刑罰的であったために、若干意味合いは異なるものの、その思想ややり方において北條氏の場合と相通ずるものがある。つまり、利休の処罰を最初から公開の斬首・獄門に処すことができたかという点、たとえ秀吉にしてもそれは困難だったのではないだろうか。何故なら、その直前に大納言秀長が病没するまでは、なんら不都合なく茶頭としてまた側近として秀吉に仕え、禁中茶会の後見役まで務めるなど大いに貢献していたからである。ところがそれを前代未聞といわれた木像の磔や、切腹でありながら獄門、しかもその木像の足で踏みつけての獄門という、珍劇を演出までしての処断をしたのである。

この秀吉によって執り行われた2つの事象において、共通して見えてくるものは何であろうか。まず第一に、そして最も重要なポイントは、双方とも聚楽第にすぐ近い一條戻橋において獄門にしたという共通点である。それは何を意味するのか。その解に至るキーは、聚楽第にあると思われるが、それについては、後述することとする。そしてさらに次のポイントについて考えてみたい。それは秀吉ならではなし得なかったという点である。由緒ある武家の規範からは、こうした発想は生まれないのではないか。秀吉の出自・生育環境を無視しては、彼の武家としての規範や義・節にとらわれない、超現

代的効率第一主義とさえいえる、出世主義は理解できないように思われる。人情家秀吉といわれるが、その心底には、冷徹にして非情な、「ひとたらしの出世主義」の顔が潜んでいたのではないだろうか。天下を取った後での元主筋である信長一族の扱い、関白就任後の後陽成天皇の聚楽第行幸などに見られる対皇室関係のやり方、関白秀次一族の処分その他に、秀吉のそうした一面が如実に現れているのではないかとと思われる。

第3節 切腹直前の利休屋敷の嚴重警固

1. 一茶人にすぎない利休の屋敷を嚴重警固することの特異性

秀吉の命により堺で閉門蟄居中の利休は、召喚命令により天正19年2月26日、京都葭屋町の利休屋敷に戻る。するとそこは上杉勢三千の軍兵により、十重二十重に取り囲まれ、嚴重警固されている。諸大名の中に利休の弟子が多く、彼らが万一利休を奪い、あるいは逃亡さすことを恐れての措置であったとされる（前稿5頁の〈史料Ⅱ-10〉「千利休由緒書」参照）。この措置は、表向きはもっともらしく、京の人々も騒ぎを未然に防ぐための当然の措置として、その場は納得し、むしろ安堵さえしたであろう。

しかし問題は、その警固の軍兵の数である。刑執行のために拘禁中の罪人に対する警固は、通常はその罪人の家人・一族・親族などの状況によって決められるのであろう。そしてそれに罪人の処罰理由の如何も勘案すべき要素となるであろう。つまり、明白な冤罪などによる処分などのケースである。だが今回の利休処断は、すでに罪状を公示しているように、大徳寺三門楼上に己の木像を安置するなどの、言語道断の不敬罪なのだといひ、天下様秀吉の処断に何人も異議を差し挟む余地など全くないのだと、大々的に事前告示しているのであるから、それに反抗する者のことなど考える必要はないはずである。そして当の利休はといえば、たとえ天下一の茶湯宗匠とはいえ、たかが一町人であり、しかもその屋敷には妻女宗恩と若干の家人程度しかいなかった。それにこれまで利休は、一度たりとも逃げ隠れなどしていないのである。

だが、利休には昵懇にしていた茶の弟子である多くの大名がいた故という

のである。確かに、利休七哲といわれる人たちは、すべて大名ないし武人である。しかしここで勘違いしてはならないのは、この時天正 19 年には、天下は秀吉の一手に握られており、秀吉に表立って刃向かう者は一人もいなかったのである。たとえ何人かの大名が密謀をめぐらせ、その場では確かに利休を逃亡させ得たとしても、これは明らかに反逆であり、秀吉としては後からじっくりと大軍を動員して、その大名を誅伐すれば済むことである。また下記に記すように、人質として妻子を京・大坂に差し出していることもあり、一族の命運を賭す覚悟なしには不可能なことであった。たとえいくら懇意な茶匠だったとしても、大名たちにとってそれほどの危険を冒す者はいないはずであった。利休が懇意にしている弟子の大名を恐れることは、天下様秀吉の沽券に関わることであり、秀吉としてはたとえ側近の進言があっても、そのために常識はずれの嚴重警固を許すことなどあり得ないのである。

更に、本当に利休を奪いあるいは逃亡させようとするなら、利休屋敷に入ってから襲うはずがない。堺での警固は嚴重でなかったし、襲撃者の痕跡を全く残すことなく襲うには召喚護送途中が最適であることは、襲う方も襲われる方も、武士ならプロとして当然承知の上であったはずである。にもかかわらず異常な嚴重警固をした点が特異であると指摘したのである。この特異事象については、これまで先行研究者の誰一人として注目していない点であるが、利休切腹の真相究明のために、極めて重要なヒントを与えてくれると考えられるので、ここで若干掘り下げて検討したい。

2. 三千名という軍兵の意義

そこで最も問題となるのが、上杉勢三千名という軍兵の重みであろう。当時の洛中における諸大名の勢力においての、この三千名という数の意義について考えておくことが重要であると思われる。

1) 秀吉による諸大名に対する妻子人質上洛命令

当時の洛中における諸大名の動静を考える場合、まず第一に標記人質上洛命令を考慮する必要がある。

＜史料Ⅱ－10＞前掲『多聞院日記』卷三十五、天正 17 年 9 月 1 日の条¹⁶⁾。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その２）

朔日、天氣快晴、諸国大名衆悉以聚樂へ女中衆令同道、今ヨリ可在京ノ由被仰付トテ、大納言殿女中衆今日上洛、筒井モ同前、世上是故震動勸也、^{（筋力）}（後略）

ただしこの記録によると、秀吉はこのとき支配下にあった全大名の妻子を、聚樂第およびその近辺の大名屋敷に常住させていたかの如く思われるが、実際には大坂城およびその周辺の大名屋敷にも多くの大名の妻子を人質的に住まわせていた、と田端泰子氏は「豊臣政権の人質・人質政策と北政所」^[7]の中で、伏見城が建設された後の状況についてではあるが、概略次のように述べている。

豊臣政権下では大坂、京都、伏見が都市としての機能を發揮し、各大名の屋敷もそれぞれ三都市すべてにではないものの建ち並んでいたことが推測される。そしてそれらの都市に大名家から妻子を呼ばせ、大名屋敷に住ませ、豊臣政権に対する人質の役割を持たせた点、制度としての人質政策＝大名妻子の都市集住政策を確立した点は、秀吉政権の特徴であるといえる。

また、秀吉による諸大名の京都・大坂への常住（人質）政策に関しては、横田冬彦氏は「豊臣政権と首都」^[8]の大坂城との関係の項で、概略次のように述べている。

東国大名については、京都にしか屋敷はなかったとみられ、西国大名についても、基本的に妻子は京都屋敷に居住していたと考えられる。一方秀吉の直屬家臣団については逆に、在大坂が基本であったと思われる。その意味で、大坂城は基本的に豊臣家中を結集した豊臣家の城であった。そして聚樂第こそが、徳川や毛利・伊達・島津などの外様大大名をも集住させえた公儀の首都たりえた。

横田氏はこのように述べたうえで、いくつかの大名の屋敷については、その所在を具体的に記し、例えば徳川家康の場合、大坂には最後まで屋敷を造営しなかったと考えられるなどと、前掲の田端泰子氏とは若干異なる見解を述べている。

いずれにしてもこのように秀吉は、天正 17 年 9 月以降は、その支配下にある全大名について、京都または大坂のいずれかに、その妻子を常住させていたことが判るのである。

2) 聚樂第およびその周辺における諸大名屋敷の配置について

では次に、聚樂第およびその周辺の大名屋敷の配置はどのようなものだった

たのであろうか。小和田哲男『城と秀吉』¹⁹⁾によると、秀吉は天皇の御所を凌駕するものとして聚楽第を建造し、公家のトップである関白としての政庁としたとのことであるが、その位置・規模等については、関白秀次の切腹直後に完全に破壊されたため、正確にはわからないとのことである。

ただし、最近の研究や発掘によって徐々に明らかになりつつあるようであり、その広さに関しては、秀次の家臣であった駒井重勝による『駒井日記』に、またその構造については、前記小和田著書所載の広島市立中央図書館浅野文庫所蔵「聚楽第図」²⁰⁾に描かれたものが、かなり信頼できるもののようである。この「聚楽第図」には、郭内およびその外郭に二十数大名の屋敷が数えられる。そしてその一角には、利休屋敷も描かれている。また同書によると、前記「聚楽第図」にない大名屋敷についても、京都市上京区の町名に残った大名（屋敷）名²¹⁾として、多少はその存在が確認できるようである。しかしいずれにしてもその詳細は判らず、他に7点の資料でも調査した（詳細省略）が、やはり依然として正確なことは不明である。

以上の史料や先行研究による諸資料等を総合して推察すると、全国の諸大名のうちかなりの大名の妻子が、聚楽第およびその周囲の大名屋敷に、人質的に常住していたことが察せられる。恐らくその数は主力大名だけでも、40大名を上回るのではないかとと思われる。

3) 利休切腹当時における在京大名屋敷での大名自身の在住とその兵力について

上記のとおり当時の洛中の大名屋敷数は、かなりの数にのぼっており、そこには各大名の妻子が人質的に常住していたことが推察される。しかしここで最も問題とすべきは、その大名屋敷に大名自身が当時在住していたか否かという点と、大名の家臣つまり兵力がどの程度いたかということである。この答えは、在京大名屋敷数の推察より数段難解であるといわざるを得ない。というのは、ちょうどその時期は、前年小田原討伐を終え、引き続いて奥羽仕置きを終えたものの、その年10月以降に奥羽各地で一揆などが多発したために、主に畿内以東の諸大名が徴発動員されたり、あるいは途中で入れ替わ

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

ったりして、非常に流動的であったからである。そこで念のため、秀吉が小田原討伐を終えた天正18年7月以降（9月1日には奥羽仕置きも終え帰京）、翌年2月末の利休が切腹するまでの間における、諸大名の上京に関する記述を、『史料綜覧』の記録から拾ってみることにした。その結果、当時確実に在京していたと思われる主要な大名としては、

毛利輝元、加藤清正、島津義弘、大谷吉継、石田三成、上杉景勝、徳川家康・秀忠、蒲生氏郷、伊達政宗、細川幽斎

程度ではなかったと思われる。そしてそれ以外の諸大名については、妻子および一部の家来や奉公人程度が常住していたのではないだろうか。

ところで最も肝腎な在京大名の兵力であるが、これに関する史料についてはわからず、その予測は極めて困難である。しかしながら次の点についてはいえるのではないだろうか。

イ、それまでの相次ぐ戦役動員によって各大名ともかなり疲弊しており、一部の親藩や直属大名を除き、最低限の兵力しか上京させえなかったのではないと思われる。ただし一部の大名については、在京させるにあたって、賄料を支給する配慮を秀吉がみせていると、前記横田著書は述べている。

ロ、基本的に豊臣政権の諸大名在京政策は、後の江戸幕府における参勤交代による、諸大名の出費を目的とした、経済的弱体化策ともいえる面は小さかったと思われる。それよりむしろ、洛中の不安定化の防止の意味からいえば、外様的大名の兵力は極力抑制されていたと考えるべきではないか。

ハ、天正19年初めの京都の町は、「京中屋敷替え」の最中であり、大名屋敷、町人住宅、寺などが、このとき大々的に移転させられている。また同時に洛中全体を御土居堀で囲む大工事を行っていたのである。当時の屋敷替えは殆どの場合が移築であった関係もあり、こうした状態のときに、大名たちが多くの家来を在京させていても、住む場所がないばかりか、その普請のための出費も大変な負担であるので、各大名は土分の家来は最低にして、それより普請に必要な少しでも多くの職人を確保しておく必要があったと思われる。

そしてその「京中屋敷替え」は、あたかも乱のようであったことが、下記

の史料で判る。

＜史料Ⅱ－11＞前掲「晴豊記」第七卷，天正19年2月2～3日の条²²⁾，

二日 雨降，十方くれのよし申候，京中惣ほり口六十間之由申候，屋敷かへ中々らんの行ことく也，井伊侍従直政所へ，いなかたる一か，鴨つかい，こふ十は，井家使者にて遣申候，煩ふせり申候間申置候也，夕方晴，井伊侍従より礼ニ使者有之候也

三日 晴，江戸之大納言家康の事也，礼ニ参候へ共，茶屋之四郎二郎ト申者ニ相尋候へハ，関白おわりより上洛候間，父子迎ニ参候間，明日午ニ可参候由申候，夕方，京中屋敷かへ共見物ニ出候，中々町人あさましき様躰也，只らんなとの行，やけたる跡の躰也，せいぐわん寺参候也，可語様無之候也

上記のような基本的前提が適用されたとするならば，次に問題となるのは，在京中の大名に対する秀吉の信頼度の如何ということになるであろう。そこで前記の当時在京中と思われる諸大名に対する秀吉の信頼度について推測してみると，秀吉が最も警戒していたのは，最後まで上洛をためらっていた伊達政宗と，その彼のために裏でいろいろ動いていた徳川家康である。そして豊臣政権にとって多少なりとも気がかりである大名として強いて挙げるとすれば，島津義弘ぐらいではないかと思われ，それ以外は秀吉にとっては安心できる大名だったのではないか。

3. 利休屋敷の三千名の軍兵による警固はやはり特異

上記の状況下において，伊達政宗は上記＜史料Ⅱ－11＞「晴豊記」の天正19年2月4日の条²³⁾によれば，一千名の精鋭を率いて上洛したのである。伊達政宗にすれば，急に気の変わることもある秀吉に対しての一抹の不安があり，場合によっては討ち死も覚悟で一千名を率いて上洛したのではなかったろうか。一方この伊達政宗に対し秀吉は，その上洛を多として，従四位下侍従叙任をもって応える。しかしそれは表向きであり，絶えずその動静は監視しておくべき存在であつたに違いない。

小松茂美『利休の死』²⁴⁾によると，上洛中の伊達は宿所に指定された妙覚寺で，在京中の諸大名と連日茶会を開いていたが，そこには伊達がかねてから茶の湯の教授を熱望していた利休も同席していたとのことである。そしてそれら諸大名の中でも特別の存在は，伊達のために陰になり日向になり動いて

いた、徳川家康であった。そして妙覚寺では伊達・徳川・利休の鼎談が度々もたれていたという。

当時の洛中における徳川の勢力は不明であるが、たとえそれが多くなくとも、彼の政治的影響力は絶大であり、伊達・徳川の動きやその思惑は、生涯最後の野望である朝鮮出兵に向けて全力を傾注しつつあった秀吉にとって、最も警戒すべきことであつたろう。そうしたときの妙覚寺での三者の茶会は、秀吉にとっては何らかの警告的メッセージを発しておくべき重要事項であつたと思われる。その結果が、それを発する事に対する表向きの理由がたち、そしてそのことによるデメリットの最も小さい、利休屋敷の異常な警固という警告・示威行為になつたのではなかろうか。

第4節 一條戻橋における木像礫と獄門

前記第2節において、利休は切腹直前に、この一條戻橋においてその木像が礫にされ、その傍らの高札によって罪状が公示され、そして切腹後には同じ場所で、その木像の足で踏みつけて獄門に晒された様子についてみてきた。そこでここでは、一体如何なる理由によって、わざわざこの橋において、そのような処置がなされたのであろうか、何故一條戻橋でなければならなかつたのか、について考えてみたいと思う。

もともと獄舎で処刑した首を、獄舎の門前に晒したところから獄門と言われるが、京ではそれ以外にも、三條河原・四條河原・栗田口などの梟首もあつたようである。しかし、一條戻橋での獄門は、十分調査できたとは言えないものの、前記北條氏政・氏照の例と本件の利休を除いては見当たらないように思われる。したがって、この問題を特異事象として、究明する必要があると考えるのである。それが、あるいは利休切腹の真相究明への、一歩になるかもしれないと思われるからである。

さてこの一條戻橋は、一條通堀川に架かる橋であるが、平安中期以来、京では曰く因縁のある橋として、有名であるところから、この特異性解明を、この橋の由緒を尋ねるところから始めようと思う。しかしそれに先立って、まず、橋という存在そのものについての、人々の精神的位置づけ、認識など

について、少なくとも平安期まで遡って見ていく必要がありそうである。そのうえで、本件の一條戻橋の由緒を尋ね、それらを踏まえて利休切腹に絡むこの橋の存在の意義を、考察しなければならないと考える。

古代における橋という存在についてであるが、そもそも橋は、こちら側と向こう側とをつなぐものであり、こちらでもなく、あちらでもない境界に位置している。そしてその境界は、単に地理的な場所としての、こちらとあちらとのつながりとどまらず、人々の精神生活上の位置・場所としての、例えばこの世とあの世、つまり仏教で言うところの、此岸と彼岸や、日常と非日常、あるいはまた、異界とこの世の世界をつなぐものであった、とされていたようである。

そこでまず、古代の人々の橋という存在の、精神的位置づけについて、『今昔物語集』に収載されている、橋をめぐる説話の二三を覗いてみることにする。ここには非常に興味深い説話がみられるが、紙幅の関係で個々の内容は省略する。

1. 平安期までの人々の橋についての精神的位置づけ

<史料Ⅱ-12> 『今昔物語集』 卷第二十，第十六話「豊前国^{かしはでのひろくに} 膳^{めし} 広国^{ひろくに}，
^{めいどにゆきてかへりきたること} 行^ゆ 冥土^{めいど} 帰来語^{かへりきたること}」の条²⁵⁾。

ここでの橋は、冥途にゆく時渡り、そして生き返ってこの世に戻る時渡る橋である。つまり、この世と冥界との境界にあり、二つの世界をつないでいる存在としての橋の位置づけである。そしてこの説話の特徴は、死んで冥途にゆく時だけ渡るという、一方通行ではなく、冥界からこの世に戻る時にも渡る橋だということである。

<史料Ⅱ-13> 『今昔物語集』 卷第二十七，第十三話「近江国^{あきののはしのおに} 安義^{やすぎ} 橋^{はし} 鬼^{おに}，
^{くらふこと} 人語^{ひとご}」の条²⁶⁾。

この話に出てくる橋は、異界との境界として、鬼・妖怪などの棲みつく場所としての存在である。これに似たような橋の位置づけは、『今昔物語集』では、他にもいくつか例が見られるが、この安義橋に続く第十四話もその一例で、やはり橋が舞台である。それは、同じ近江の瀬田橋で「従東国^{のぼるひと} 上人^{おにに}， 値

あふこと
鬼語」の条²⁷⁾である。

これまで、古代の人々にとっての、精神生活上の一般的な橋の位置づけの一端をみてきたが、次に一條戻橋について、こうした観点からその歴史・由緒をみることにする。

2. 一條戻橋の由来・来歴

一條戻橋の由来・来歴などに関する記録は数多いが、そのいくつかを示すと下記のとおりである。ただし、紙数の関係もあり内容は割愛する。

＜史料Ⅱ-14＞西尾光一校注『撰集抄』巻七、第五「仲算佐目賀江水掘出事」の条²⁸⁾。

この巻七、第五は、延喜の御代の末頃の説話であり、この話の終わりに、天台宗の僧淨藏貴所が、父である宰相三好清行の葬列に一條の橋で行き違い、覷法して蘇生させたところから、その一條の橋を戻り橋と呼ぶようになったと記しているものである。つまりこの部分は戻橋の由来について記したものであるが、また同時に、上記＜史料Ⅱ-12＞のタイプに属する、死者が生き返る橋としての、一條戻橋の存在をも示している。

＜史料Ⅱ-15＞『今昔物語集』巻第十六、第三十二話「おんざやうのをとこ隱形男、依六角堂みをあらはせること観音助 顯身語」の条²⁹⁾。

これは、一條戻橋の上で、百鬼夜行に遭遇する男の話であり、上記＜史料Ⅱ-13＞に類するところの、鬼・妖怪・魔物の棲む、異界との境界という位置づけとしての、一條戻橋の存在である。

＜史料Ⅱ-16＞「参考源平盛衰記」巻第十、「中宮御産事」の条³⁰⁾。

この話に登場する一條戻橋では橋占も行われており、その橋占には、その昔安倍晴明が召し従えていた十二識神が、人の口に乗り移って善悪を示したということである。このように、この橋は安倍晴明にも関係する靈的場所として描かれていて、多少変形ながら上記＜史料Ⅱ-13＞タイプの、一種の異界との境界としての位置づけである。

一條戻橋にはこの他にも、「平家剣巻」上³¹⁾では、源頼光の四天王の一人である渡辺綱が、この橋で馬に乗せた女が鬼女であった云々という、異界との

境界としての位置づけの話もある。また、歌集「和泉式部統集」の1445番の和歌を引きながら、「婚礼の輿入れこの橋を通る事嫌ふは橋の名によりてなり。又旅立人にものを貸時通るは、これに反すとやいふべき」と記す、江戸時代の庶民のこの橋に対する精神的な位置づけも、秋里籬島作「都名所図会」巻一、吉野屋為八出版、安永9年(1780)³²⁾、にみられる。

3. 一條戻橋の特異性と利休の獄門

以上のとおり平安期までの人々の橋一般についての精神面における位置づけ、あるいは意識といったものを振り返りみてきた。そのうえで、古代の人々が抱いていた、橋というものが神秘性・怪異性などにつつまれているという意識が、この一條戻橋にも根強く息づいていることを、その由来を確認し、さらに江戸中期にいたるまで、変容したその残滓があることをみてきた。

さていよいよ、では何故こうした特異性をもつこの橋で、利休は獄門に晒されたのか、あるいは晒されなければならなかったのか、について検討しなければならない。それには、この橋のもつ特異性に照らして検討することが重要であると考えられる。そこで、これまでみてきたこの橋のもつ特異性を要約すると、一つには死者の生還、つまり戻橋のそもそもの由来となった、生き返りの橋である。そして二つ目として、鬼・妖怪などが棲みつき、あるいは行き交う橋であるという点である。

そこでまず前者の生き返りの橋としての、一條戻橋における獄門について検討する。すると、あまりにもこの処置は、処断当局者にとって、皮肉な結果を招きかねないことが、検討するまでもなく判る。つまり、その罪万死に値するとして、地獄に送った筈の利休が生き返ることになるからである。切腹原因が讒言によるものとした場合、当局者にとってこの処置は、利休の辞世の狂歌そのものの現出を招き寄せることになり、まともにこの点の認識に立てば、できないことである。この橋の特異性のうちその最たるものは、その名前の由来からして、死者の生き返りであるから、そのことを考えると、処断当局者は、この視点を全く欠き、認識していなかったに相違ないと言えるであろう。この点については、同様のことが、北條氏政・氏照兄弟のこの

橋での獄門についても言えることであるが、生き返りの橋としての一條戻橋での獄門ではなかった、ということは明言できそうである。

次に、鬼・妖怪などの棲む異界との境界としての、この橋での獄門についてであるが、考えてみると、この特異性をもつこの橋での獄門は、その必要性・論理的必然性において、明確な根拠に欠けるように思われる。つまり、地獄に送った利休の首など、鬼にでも喰われるがよい、とばかりにこの橋に晒したのだとすると、多少理解できないこともないが、逆の結果にもなり得るということも考えられるからである。前述のごとく、讒言によって処断したのであればなおさら、逆にこの橋上で鬼や識神などの靈力を借りて、復讐してくることも考えられるであろう。したがって、この特異性を意識したこの橋での獄門でもなかった、と言えるのではないか。

それまでの既存仏教などを根底から否定し、自ら神になろうとした革命者信長の、最も優秀な後継者であり、信長以上の超現実主義者でもあった秀吉が、これまで見てきたような、一條戻橋の歴史的な靈的空間としての認識に基づいて、その橋で獄門に晒すという処置をしたということを、理解しようとすればするほど、秀吉に対する理解についての矛盾が、大きくなっていくようである。どうやらこの辺で、全く別の視点・角度から、この問題を検討する必要があるように思われる。

4. 獄門が一條戻橋でなければならなかった必然性

利休のこの橋における獄門について検討する前に、前記でも若干触れたが、その前年における唯一の前例、つまり、北條兄弟がこの橋で獄門に晒された事象について、ここで点検してみる必要がある。

北條兄弟は天正18年7月11日、小田原の田村安清の家で切腹するが、同月16日には両名の首級は、京都一條戻橋で獄門に晒されたことが、前記『(甫安)太閤記』や「晴豊記」などから確認できるところである。北條兄弟が切腹でありながら獄門にされたということについては前述済みであるが、ここでは、その獄門が京の一條戻橋でなされなければならなかった必然性について検討することで、利休の場合における同一事象が解明できるのではないか

と考えるのである。つまり、利休の獄門は、同じ秀吉による約8ヶ月前の北條兄弟の前例に倣ったもの、とも考えられるからである。

北條兄弟の獄門が何故、小田原城下でなされなかったのか。元領主であった北條兄弟の誅伐が、天命を恐れざるものへの罰として、広く領民に知らしめるための最も効果的な場所は、小田原城下のはずである。あるいは、知らしめる対象が領民ではなく、全国の諸大名だとするなら、大名屋敷が集中し、秀吉が武門のトップとして、全国支配の本拠として築いた、豪壮無比を誇る大坂城下こそが最も相応しい場所ではなかったのか。それが何故京都一條戻橋でなければならなかったのか。

この問いを解く鍵は、どうやら聚楽第にあるのではないと思われる。つまり、聚楽第にすぐ近い場所が、一條戻橋だったということではなかろうか。その聚楽第は、そもそも天皇の名代であるところの、公家最高位の関白太政大臣の政庁として築造されたものである。したがってその場所での獄門は、日本全国の諸大名を支配する武門のトップとしてではなく、天皇の名代の関白太政大臣としての、見せしめを示す処置だったと言えるのではないか。

では何故わざわざ、関白太政大臣としての見せしめが必要だったのか、という問いに対する答えが必要となる。奥羽を除く日本全国を平定し、今や、諸大名を統治する武門のトップとして、恐い者なしであるはずの秀吉にとって、天皇の名代・関白太政大臣としての權威により、威圧しなければならないだけの存在がなければならないことになる。天下人となった当時の秀吉にとって、そのような人物が、果していたのであろうか。実はいたのである。それは他ならぬ徳川家康であった。秀吉は家康に対して、小牧・長久手戦以来終生消えることのなかった、コンプレックスをもち続けていたと思われるからである。

秀吉が、徳川家康の二女を妻とする小田原北條氏の当主氏直を討伐しようとしたのは、天皇の名代・関白の權威をもって、天下静謐を標榜して発した、停戦令に従わなかった故である。また家康は氏直を説得し、秀吉に臣従させ得なかったが故に、最も過酷な動員割り当てのもとでの先鋒として、我が娘

婿を攻め滅ばす役目を命ぜられる。そればかりか小田原落城後は、先祖伝来の故地を追われ、北條一族の怨嗟渦巻く彼らの領地であった関東の地へ封じ込められる。それでもなお小牧・長久手トラウマが重くのしかかり、それから抜け切れない秀吉は、家康に対して、天皇の名代である関白太政大臣の権威で威圧するため、北條氏政・氏照を、聚楽第近くのこの場所で獄門に晒すことを、その家康の面前で命じたのではないかと考えられるのである。

このことは本稿前記<史料Ⅱ-8>『(甫安) 太閤記』の、「兩人之面を秀吉公へ家康卿御持参有しかば、不恐天命者の事なれば、洛之戻橋に掛置可申旨、石田治部少輔に被仰付にけり。」という記述からも読み取れるのではないか。この時の家康の心中は如何許りであったであろうか。一朝事ある時の自国の背後の安全確保のための北條との盟約を、己の手で消滅させられ、その盟約相手の首級を、切腹をさせながら己への見せしめのために、聚楽第の門前で獄門に梟けさせるというのである。この仕打ちに対する恨みは、おそらく骨髓に徹したものであったであろう。しかもこうした秀吉の東国政策は、石田三成が中心になって推進していたのである。家康のこの時の秀吉や三成に対する屈辱は、関ヶ原そして大坂夏の陣が終わるまで、決して消えなかったことであろう。

この秀吉の対家康政策は、その後の豊臣政権の北関東・奥羽政策に反映されていくことになる。このことについて藤田達生氏は『秀吉神話をくつがえす』のなかで、その内容の一部を要約すると次のように述べている³³⁾。

秀吉の意を体して、北関東・奥羽政策を実施する石田三成は、自分との結びつきが強い浅野長政に、蒲生氏とともに奥羽の豊臣化を推進する役割を担わすが、それは明らかに、家康の政治的影響力の低下を狙うものであり、三成らの強硬派と家康らの融和派の大名派閥間の抗争が、表面化した人事といえる。しかしそれでも秀吉は、終生、家康を一般大名と同様な主従制のもとに置くことができず、関東二百五十万石の領国において、独自の支配体制を構築し、伊達政宗ら大大名との連携を背景に、発言権を持つ家康に対して、特別の存在として処遇せざるを得なかった。

そしてその一つの例として、小林清治『豊臣権力の形成』で記す、秀吉の家康に対する書札札を挙げている。つまり秀吉は、諸大名に宛てた直書の結びを「～候也、朱印」としているのに対し、家康には「～謹言、花押」という、

丁寧な書札札を適用しつつづけているとのことである³⁴⁾。

これで北條兄弟の獄門首が、聚楽第にすぐ近い一條戻橋で晒された理由が判明した。ならば、利休の同じ一條戻橋での獄門はどうなのであろうか。利休の場合も基本的には北條兄弟とはほぼ同様の理由によると考えられるが、それをより具体的にみると次のことが言えるのではないかと。まず、利休は秀吉の禁中茶会を後見し、主上より利休居士号を下賜された、天下一茶湯宗匠であるにもかかわらず、その主上はじめ親王などもその下を通るであろう大徳寺三門楼に、己の木像を安置するという僭上について処断し獄門にするには、聚楽第と禁中の間にある一條戻橋が、皇族・公家衆に対する効果として最も適した場所である。さらに、利休は全国の諸大名に門弟を多くもつが、彼らに対する見せしめとしては、聚楽第の近くがこれまた最も効果的である。大坂城周辺に大名屋敷は多かったものの、利休が諸大名を相手に茶会を開いたのは、聚楽第であり利休聚楽屋敷が中心であったからである。これらの理由により、堺に追放中の利休を、わざわざ京に召喚し、切腹させたいと、聚楽第にすぐ近い一條戻橋で獄門に晒したのであろう。

それに、この利休の一條戻橋での獄門には、重要な一面があったことを見逃してはならない。それはこの時もまた、当時上洛中で聚楽第近くの大名屋敷に滞在していた、徳川家康に対する見せしめである。北條兄弟の獄門の場合も同様であるが、皇室や公家に対する体面としての処置という、表面上の理由の裏に、徳川家康に対する警告・見せしめという、重大な意味が隠されていたのではないだろうか。つまり北條兄弟と同じこの一條戻橋で獄門にすることによって、家康に警告していることを知らしめる必要があったとも考えられるからである。利休の獄門によって、家康に警告しなければならなかった理由については後述するが、これら二つの獄門には、対家康警告・見せしめという意味で、通底する処分であったと言えるのではないだろうか。

以上で、利休を獄門にしなければならなかったこと、およびそれが一條戻橋でなければならなかった理由が、大体納得し得るのではないかと考えられるが、筆者には、さらにそれが、何故一條戻橋であって、聚楽第ではなかつ

たのかという疑問が残り、いろいろ苦慮した結果、原点ならぬ原典に立ち戻ることにした。

その結果、次の原典史料の記述を、見逃していたことに気づいたのである。まずそれを次に見ることにする。前稿第Ⅱ章第1節の利休切腹の状況に関する事件当時の記述原典の内、木像磔および獄門について記述した原典には、次のものがある。

前稿4頁の〈史料Ⅱ-2〉では、「その木さう、しゆらくの橋の下、はた物ニあげられ」、同頁の〈史料Ⅱ-3〉では「宗易木像、大徳寺ニ在之、今度、宗易御勘気也、依之、聚楽之橋ニ被曝置之」、同じく5頁の〈史料Ⅱ-5〉では、「聚楽之大門毛どり橋と申候所ニ、張付ニかけさせられ候、」、そして同頁の〈史料Ⅱ-6〉では、「くひをきり、木さうともにしゆらく大橋にかけ置候也、」とある。

これら上記史料によると、〈史料Ⅱ-2〉には「しゆらくの橋」、〈史料Ⅱ-3〉にも同じく「聚楽之橋」、〈史料Ⅱ-6〉には「しゆらく大橋」、そして〈史料Ⅱ-5〉では、実に「聚楽之大門毛どり橋」とあるではないか。事件当時の記録である6史料中の2史料は、場所を特定する記述がないので除くと、場所に言及している4史料すべてが、聚楽の橋と記録しているのである。そして上記のとおり、〈史料Ⅱ-5〉ではより明確に、「聚楽之大門毛どり橋」と特定している。これら4史料の記述者全員は、決して一條戻橋を意識していたのではなかったのではないかなと思われるのである。〈史料Ⅱ-5〉によると、その橋はいわゆる一條戻橋ではなく、聚楽第大門前の橋だったことが判り、獄門に晒したのは、やはり、聚楽第の門前であったと思われるからである。このように考えてくると、一條戻橋の古代以来の特異な霊的空間、つまり、死者が生き返る橋・異界との境界の橋という位置づけとしての橋における獄門、というより、いかにも現実的政治家秀吉らしい、聚楽第門前の橋における獄門であった、と判断する方がより自然であり、かつ合理的であると言えるのではないだろうか。

ならば、一條戻橋での獄門と一般的に言われる所以は、どこから来ているのであろうか。その答えを求めて江戸時代の原典を見ることにする。利休の木像磔や獄門の場所について記述した史料は、江戸時代の全10史料中の、前

稿 5～7 頁の＜史料Ⅱ-7・8・10・11・12・13・14・16＞の 8 史料および、そのうち、＜史料Ⅱ-8・10・11・13・14・16＞の 6 史料が、一條戻橋と明記していることが判る（ただし、残る 2 史料である＜史料Ⅱ-7＞は「洛中大路に御仕置き」と記し、＜史料Ⅱ-12＞は「反橋ニ梟スベキ由」とのみ記している）。「利休が京都一條戻橋で獄門に梟けられた」などというのが、通念になっているのは、どうやらその所為によるものらしいことが、これで納得できるのである。

ところがまた、では何故安土桃山時代では、「聚楽之橋」などのように聚楽第に視点を置いた表現になっていたにもかかわらず、江戸時代になると、完全に「一條戻橋」という表現に変化したのかという、新たな疑問が出てくる。その理由は至って明快である。つまり利休は切腹させられた当時は、洛中の聚楽第本丸内や利休聚楽屋敷を中心に、活躍していたものと考えられ、秀吉も聚楽第に滞在することも多く、言わば聚楽第はその最盛期とも言える時期にあったためと考えられる。そして聚楽第の門の前にあった橋が一條戻橋であったが、当時は聚楽第が天下人秀吉の居城として、京の中心であったために、その橋は「聚楽の橋」とか「聚楽大橋」などと、公家や町衆も一般的に呼んでいたであろう。

ところがその聚楽第は、関白職を秀次に譲ってからは秀次の居城となるが、文禄 4 年（1595）に秀吉が切腹させられるや、完全に破却されてしまい、跡形もなくなってしまう。また、秀吉は、朝廷を利用できるところは利用し尽したので、その頃になると、その利用価値も殆ど認めていなかったであろうか、新たに築城していた伏見城を居城としていたのである。したがって、江戸時代になると、聚楽第のことは人々の記憶から完全に消失していたかのように思われる。また仮に記憶に残っていたとしても、徳川の治世になってそのように呼ぶのは、憚られたことであつたろう。そこで平安朝の時代から呼ばれていた、旧來の戻橋の呼称に戻ったのであろう。以上の理由によって、北條兄弟の獄門も、利休の木像磔や獄門も、一條戻橋、より正確に言えば当時の「聚楽の橋」において、なされるべき必然性があつたことが理解できるのである。

ところでここで敢えて付言しておきたいのは、北條兄弟の首が切腹でありながら、聚楽の橋にて獄門にされたのは、上記のとおり「石田治部少輔に被仰付けり。」と記されているように、石田三成に命じてやらせていることであるが、三成のこの経験は、その翌年の利休の獄門に生かされたということである。

第5節 利休切腹の状況における特異性と切腹原因との関連について

ここでは、利休切腹の真相解明への一つのアプローチとして、前記の4分類項目におよぶ切腹の状況における特異性の分析・検討結果を踏まえて、それらが切腹原因に関して記録した記述者に、どのような影響を与えたのかという観点から、その関連性について簡単に総括しておきたい。（なお本節は、前稿25～30頁に記した「史料記述内容の分析・検討」の項について、前記の本章第2節などの検討結果を踏まえて補完したものである。）

1. 特異性が切腹原因の記述に与えた影響

前記本章第2節でみてきたように、切腹前になされた、木像の磔および高札掲示という視覚的効果を狙った、罪状事前告示および処断・刑執行方法の予告と、当局者が問題指摘した本人の木像の足で踏みつけた獄門という事後公示の、顕示・強調効果は、切腹の原因について当時の人々に強烈な印象を与え、また後世の人々にも多大な影響を及ぼした。それは前稿25頁の「切腹原因項目別記述史料数」にみるとおり、公示罪状の一つである原因項目①および① α の木像安置不敬罪の圧倒的多数と、高札公示原因の他の一つである原因項目②および② α の^{まいす}売僧行為罪の結果となって出ている。そうした意味では、利休処断当局側の意図したとおりの、正に図に当たった演出・策謀であったといえよう。何しろその効果は幕末近くまで及び、前稿21頁の<史料Ⅲ-17>に見るとおり、天保4年（1833）成島司直改撰になる『改正三河後風土記』の記述にまで影響を与えているようである。

2. 特異性が切腹原因の記述に与えた逆影響—讒訴・讒言の意味するもの

ところがそうした特異性効果の影響をストレートに受けたのは、表面的事象しか知り得なかった事件当時の人々、および後世の利休とは全く無関係の人たちであった。一方で直接あるいは間接的に、利休と関係があったと考え

られる人々に対する影響は、どうであったのであろうか。前稿 24 頁の表にみるとおり、ストレートに原因①や②のみを記したものは、前稿 19 頁の<史料Ⅲ-5>「利休居士伝書」以外では全くなく、また①や②を挙げている史料には、必ず③の利休娘側室拒否やその他の原因が併せて挙げられているか、あるいは「+ α」つまり①や②であっても、讒訴・讒言によるものであることがわかる。(ただし、同<史料Ⅲ-5>がストレートに原因項目①のみを挙げていることについて、若干ここで補足する必要がある。それはこの史料が「利休居士伝書」であるため、利休が切腹を賜ったのは、この木像安置を理由とされたためであるとして、その真偽は別として、淡淡と公示罪状の首罪のみを記したものと考えられるからである。)

ではこの讒訴・讒言の意味するものはいったい何であったのか、について考えてみることにする。処断当局者の公示した原因①および②は、そのあまりにも意図的と思われる強烈な視覚的印象付けが、少なくとも利休と何らかの接点のあった、茶人・武家などの関係者の間では、ある種の逆効果として、作用した結果ではなかったろうか。彼らの間では、「此見よがし」になされた、顕示・強調の不自然性と、それまで直接あるいは間接に見聞きしてきた、利休や利休と秀吉との関係から考えてみて、切腹原因について素直に公示どおり受け入れられなくなり、何らかの疑惑を持って、事件を振り返られることになったのではないだろうか。そして、あれこれ考え合わせて見ると、「秀吉近侍の木下祐桂が、利休に娘の件で面目丸つぶれにされた、と怒っていたらしい」とか、「前田玄以は、大枚をはたいて手に入れた胴高茶入れを、肩衝だと(誤認して)自慢げに利休に見せたら、全く無視された、と当り散らしていたそうだ」といった噂があったことに思い当たる(前稿 19 頁の<史料Ⅲ-6>・同 20 頁の<史料Ⅲ-10>など参照)。こうしたことが公示罪状に対する疑念と結びついて、讒訴・讒言説となってあらわれ、あるいはまた、ならば別の原因か、ということで思い当たった原因③の利休娘の一件説とともに、利休と何らかの接点のあった人たちの間に広まったものと考えられるのではないか。

ここで注目すべきは、利休を殺してしまったことを、秀吉が後悔する次のような記述史料が見られることである。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

前稿 17 頁で取り上げた<史料Ⅲ-6>「三斎公伝書」には、「後ニ秀吉公御後悔無限事ども也。」と同 19 頁の記述に続いて記されており³⁵⁾、また同じく前稿 19 頁の<史料Ⅲ-7A>「千利休由緒書」には、「其後讒言にて利休^{エシ}冤死之段無罪ニテ死ル事、秀吉公御聞届被成、御後悔不淺、」という記述があるが、これに続いて「其前利休か不審庵へ御成、御茶ヲ被召上候時、宗旦ハ利休孫ニテ、八九歳なり、喝食^{カツジキ}の鉢にて御茶の湯の御宮仕仕候ヲ、よく御覚被成、聚^{ジュラク}樂ノ時分、利休かたにて宮仕つとめたる喝食、十二三にももはや成らん、少庵が子之由御聞被成候、是ニ利休か道具ヲ被下置との上意ニテ、名物珍宝の入たる長持三^{サツ}棹ヲ拝領、」という記述もなされているのである³⁶⁾。

さらに前稿 19～20 頁の<史料Ⅲ-9>「茶道要録」の記述を再度載せさせていただくと、「伝云、是皆讒口ノ吹拳ニ因テ如此、利休聊カ私僻^{キタク}ノ黒キ心ナシ、逐一是ヲ陳謝スルニ不及、世皆知所明カ也、其邪曲無カ故ニ今ニ至テ其所持ノ茶具筆跡ノ価ヒアル事、又賞玩タルノ義^ミ 上御一人ヲ始奉テ下一己ノ庶人等マデ珍器重宝トセズト云事ナシ、是以テ知ベシ、公モ頗ル御後悔有シト也、」とあり、また同 17 頁で取り上げた<史料Ⅲ-10>「茶湯秘抄」には、「利休切腹後ニ太閤御後悔無限事トモ也^{右三斎公語}」などと 20 頁の記述の間の部分に述べられている³⁷⁾。

ここで、上記で取り上げた前稿<史料Ⅲ-7A>について若干補足する必要がある。それは原因①に関連して大徳寺へのお咎めもあったが、問責使に対する古溪宗陳の堂々とした釈明により、長老衆は赦免されたとの記述もなされている³⁸⁾（この部分の引用は長文のため紙数の関係で省略）ことである。そしてこの本像事件は讒言による冤死であったとして、秀吉が後悔しており、そのためか秀吉は利休の孫の宗旦に、利休切腹時に召し上げた名物茶器の入った長持三^{サツ}棹を下げ渡した（上記引用箇所参照）となっている（ただ、この史料の記述は利休子孫の口述録であるところから、その評価には異見もあるかとも思われるが、利休遺愛の名物茶器を下げ渡していることから、その後悔はやはり真実味があると言えそうである。）。ところがこの史料の記述者である利休子孫としては、大徳寺長老衆を赦免する一方で、利休を切腹させたという処断の不整合性があり（この点については後述）、そのことが讒言の介在を信じさせることになり、「だから後になって、秀吉は後悔したのだ」と確信するようになり、上記のような記述をすることになった、と言えるので

はないか。

また上記の前稿＜史料Ⅲ-9＞「茶道要録」のように、原因②に関しては、利休が評価した茶道具が彼の死後も珍重されている現実から、利休の鑑定・売買に私曲がなかった故であると述べているのであり、同時にこの原因は讒言によるものであり、秀吉公も頗る後悔していると記しているのである。同様に秀吉の後悔は上記の前稿＜史料Ⅲ-10＞「茶湯秘抄」でもみるとおりであるが、これら秀吉の後悔を記した史料では、その原因についてはいずれも、讒言によるものであると記している点が非常に興味深い。

こうした筋立てからみえてくると、秀吉はどうやら讒言を信じたが故に、誤って利休を殺してしまい、後悔の念に駆られたというストーリーになるのかもしれない。というよりむしろ、利休と何らかの関係のあった江戸時代の人たちは、少なくともそのように考えていたと言えるのではないか。

Ⅲ 公示罪状の真相について

前章第1節および第2節で、利休切腹にみる特異性について検討した結果、公示罪状である大徳寺三門楼上木像安置という首罪は、古証文を突きつけての処断であったと述べた。また処断当局者による、その罪のいかに不礼・不義であるかという執拗極まりない強調・顕示は、利休の獄門を正当化させるための偽装工作による演出であった旨述べてきた。そして前章第5節では、同第2節で述べた当局者の過剰な演出などによって、他の一つの公示罪状である売僧行為罪も含めた両公示罪状について、利休と何らかの関係や縁をもっていた江戸時代の人たちにとっては、疑念をもって受け取られるようになり、その結果が讒訴・讒言説や、他の各種原因説となって、記述されることになったと述べた。

そこでここでは、これら両公示罪状について、さらに掘り下げて検討することで、その欺瞞性をまた別の角度・視点から検証しようとするものである。（なお、これら両公示罪状が表向きの理由、つまり口実であったとする先行研究は、前稿32頁の「先行研究における切腹原因説分類」でもみたようにいくつかある。しかしながらそれらの根拠は、

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

単に前稿 19 頁の〈史料Ⅲ-7B・8〉など多くの江戸時代の史料の、その旨の記述に依拠するものと思われ、前章第 1 節および第 2 節でも若干触れたように、本格的に論考されたものではないことを、僭越ながらここに再度確認しておきたい。）

第 1 節 大徳寺三門楼上木像安置不敬罪について

1. 大徳寺三門楼上への木像安置不敬罪が切腹の最大原因

この罪は、切腹前に木像を大徳寺三門楼上から引き降ろし、聚楽第にほど近い一條戻橋に磔にしたうえで、傍らに掲げた高札において、罪状の第一に挙げたこと。そして、切腹後においては、切腹でありながら、その首を同じ一條戻橋に、本人のその木像の足で踏みつけた状態で獄門に晒したことが、切腹原因に関する原典記述内容の分析・検討で述べたように、切腹の最大原因であったことを示している。というより、正しくは、そうすることでそれが最大原因であるということを、示そうと意図していたと言える。

そしてその理由は、前稿 19 頁の〈史料Ⅲ-7A〉「千利休由緒書」にも記されているごとく、天子や院も行幸し、また摂家等の尊貴も通り給う三門の上に、己の木像をおき、その足で貴人たちの頭を踏ませるなどという、不礼・不義は言語道断の不敬罪である。よって、獄門も当然であるというのが公式の罪状であった。

2. 三門楼上への木像安置は大罪か

仏教寺院の大門・三門（山門）楼上への、仏像や始祖・中興の祖などの像の安置は古来一般的で、なんら珍しいことではない。しかし仏像を別にすると、僧以外の世俗の人が、たとえ功労があったとしても己の木像をつくり、楼上に安置させるなどという事例は、これまでのところその例を知らないことであった。その意味においては、利休の科された罰は、それが古証文を突き付けての処断であったとはいえ、最高権力者によってそれを口実に使われれば、一見、ある程度はやむを得ないことのようにも思われた。しかし、利休切腹の原因究明を本論文の主要課題としている関係上、切腹の最大原因として公示された、罪状そのものが真にそれほどの大罪であったのかどうかについて、疑って見る必要がある。このため、大徳寺と同じ洛中や京都近在の主要寺院

において、それらの門の楼上に俗人の像が安置されている事例があるか否かについて、調査することにした。

調査の対象としたのは、次の寺院の門である。

イ、清水寺仁王門 ロ、広隆寺南大門 ハ、知恩院山門 ニ、東寺南大門 ホ、東福寺三門
ヘ、南禅寺三門 ト、仁和寺仁王門 チ、妙心寺三門 リ、延暦寺総門 ス、醍醐寺仁王門
ル、万福寺総門 オ、三井寺大門

その結果、唯一の事例だけではあったが、知恩院山門楼上にそれを見ることのできた。そこに安置されているその像は、知恩院山門の造営に貢献した人物夫妻の木像であることや、俗人である点において、利休の木像安置とよく似た事例であるという意味で、まず特筆されるべきであろう。この木像安置の時期は、利休切腹より数十年余り後とは思われるが、その安置の経緯からみて、またその寺院が知恩院であったという点からみても、利休の事例で公示されたような、言語道断の不礼・不義の不敬罪に真に相当したのかという、疑念を抱かざるを得ないものである。そこで次にその詳細をみることにする。

3. 知恩院山門楼上安置の木像について

1) 知恩院と徳川氏

末寺 7,500 余ヶ寺を擁する知恩院が、法然房源空を開基とする浄土宗総本山であることは、遍く知られるところであるが、今日の隆盛についてその歴史をたどると、その飛躍への最大の要因は、徳川氏の外護によるものであることが判る。

以下で梅原猛・岸信宏『古寺巡礼 京都・知恩院』³⁹⁾の内容を要約し、簡単にその寺運伸張を、徳川氏との関係からたどってみる。

徳川家康は、法然上人の熱烈な崇拝者を自称し、三河時代から浄土信仰に厚く、知恩院を保護し徳川家の菩提寺とする。文禄4年(1595)には、万里小路秀房の孫を猶子として、知恩院住持とさせる。第29代尊照である。尊照は家康・秀忠の絶大な外護を得て、大伽藍造営、宮門跡推戴、浄土宗法度制定など大きな功績を残している。慶長8年(1603)家康は、寺域を拡張し諸堂舎建立を命じた。またこの年寺領も700余石に加増した。こうして慶長15年、尊照は「知恩院境内及本堂諸堂御建立」完成によって、駿府の家康、江戸の秀忠の許に、御礼言上に

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

行くまでになる。また慶長18年（1613）には、幕府は紫衣勅許制を定めるが、その時禅宗などに伍して浄土宗知恩院にも紫衣勅許を沙汰する。これも尊照と家康の親交によるものとされる。

2）知恩院山門造営と山門楼上安置の木像

引きつづき前掲書では次のように述べている。

元和2年（1616）生涯を終えた家康の遺志は、秀忠に引き継がれる。秀忠は翌3年上洛して、亡父の菩提を弔うため、三門および経蔵の造営寄進を發願し、川勝信濃守広綱、宮城丹波守豊盛、五味金右衛門豊直を知恩院奉行に任じた。同5年に竣工、現在の三門、経蔵がこれである。

ただし、実際の知恩院奉行任命と山門の竣工は、「徳川実紀」によると下記のとおりであった。

＜史料Ⅲ-1＞「台徳院殿御実紀」卷五十一、元和5年（1619）9月10日の条^{40）}。

十日（前略）川勝信濃守広綱。五味金右衛門豊直。宮城丹波守豊盛京知恩院造営の奉行を命ぜらる。

とあり、三氏が知恩院奉行に任じられたのは、元和5年9月10日であり、その2年後の元和7年完成という寺伝と一致する（平成の大修理に同年の墨書発見）。

ところでこの知恩院山門楼上には、白木の棺が二つあり、それらの棺には木像が安置されているが、これらの木像はこの知恩院を造った大工の五味金右衛門夫婦の像として現在まで伝えられている。ということは、その木像の人物は上記＜史料Ⅲ-1＞に記す、知恩院造営奉行の五味金右衛門夫婦に相違ないことがわかる。

3）山門楼上安置木像の人物・五味金右衛門豊直とは

さてこの五味金右衛門豊直という人物であるが、鎌田道隆「所司代と町奉行」^{41）}によると、彼を次のように紹介している。つまり、三代将軍家光は、京都所司代を中心にして西日本を支配していくために、八人衆による合議制システムをつくるが、彼はそのひとりで、身分は最も低いが総括奉行として、経済感覚に優れ土木技術にも長けていたため、徳川氏に抜擢された京都支配の中心人物であったという。ただし、『国史大辞典』吉川弘文館の「京都所司代」や「京都町奉行」の項に挙げる、歴代リストには、彼の名前は見当たらない。また、佐和隆研他編『京都大事典』^{42）}では、寛永11年（1634）初代京都

代官奉行となり、山城および丹波の天領支配、禁裏や仙洞御所の修復、諸河川支配、御朱印人足の徴収などにあたった云々と紹介し（この記述は、上記『国史大辞典』の「京都代官」の項と一致する。）、その没年は万治3年（1660）としている。

このように、彼の正確な人物像は、今のところ確定し難いところもあるが、前記「徳川実紀」の記述も併せると、一応次のように考えられるのではないか。つまり、元和5年9月10日、秀忠の命で知恩院造営奉行に任命され、元和7年完成させる。その後秀忠は寛永9年（1632）亡くなるが、三代家光により寛永11年初代京都代官奉行に任じられ、八人衆のひとりとして、西日本支配の一翼を担って活躍した。そして知恩院造営奉行あるいは京都代官奉行としての功績により、自らが造営した知恩院山門楼上に、木像が祀られることになったのではないか。いずれにしても、知恩院造営奉行として山門を造営したのが、一俗人である五味金右衛門豊直であり、その後、彼の木像がその山門楼上に安置され、今なお現存しているのは事実である。

そして上記のとおり、この知恩院は京都における徳川氏の菩提寺であり、御影堂（本堂）には、本尊法然上人坐像が安置され、両脇の後方には脇壇があり、その東壇には阿弥陀立像のほか五人の上人像、西壇には家康・秀忠および家康母堂伝通院殿の坐像が安置されているのである。また慶長12年（1607）には、家康の奏請により後陽成天皇は、自らの第八皇子直輔親王を門跡として治定される。親王は元和5年に得度後、良純法親王と号して初代宮門跡となる。そして以後宮門跡は明治維新まで続く事になる。

こうしたことから、将軍家が上洛した際には、この山門をくぐり参拝することも当然予想されていたはずであるにも拘らず、五味夫婦の木像が山門楼上に安置されていたことは、不敬であるとは見做されていなかったのではないかと考えられるのである。つまり、大徳寺三門楼上木像安置不敬罪という首罪は、前章第1節も含めて、これで冤罪であったことが、証明されたといえるのではないだろうか。ただし、この木像の安置時期の特定はできないし、また、山門竣工後の将軍家の参拝について調査したが、総本山知恩院史料編纂所編『知恩院史料集』（日鑑・書翰篇）には当時の記録がないとのことであ

り、前記「徳川実紀」および前記『史料綜覧』（巻十五～十七）により、寛永11年（1634）までの記録を見た限り、その記述は見当たらなかったことを付記しておく。

第2節 木像安置不敬罪の処断における不整合と売僧行為罪について

1. 木像安置不敬罪についての片や大徳寺長老衆の赦免と他方利休の切腹という不整合

前稿19～20頁の〈史料Ⅲ-8・9・13〉によると、利休は古溪宗陳と相議したうえで、三門を改築し木像を安置したと記している。だが前稿5頁の〈史料Ⅱ-6〉「北野世家日記」では、長老衆は大政所や大納言後室の執り成しによって赦免されたとなっている。また前章第5節2でも述べたように、前稿〈史料Ⅲ-7A〉「千利休由緒書」の別の箇所の記述にも、大徳寺への問責使に対する、古溪宗陳の命を懸けた釈明に、家康が感激して助命に動いた、などと記しており、当事者の片方である大徳寺長老衆は赦免されるが、もう一方の利休は切腹させられるという、処断のアンバランスが生じている。

このように長老衆が不問とされたのであれば、利休も許されるはずであり、この不整合性については何も述べられていない。何より大政所などの執り成しは長老衆側から懇請したためとは考えられない。それは古溪宗陳が三門改築・木像安置について「仏道の尊貴なり」として、なんら咎め立てされる筋合いはないと、堂々たる釈明をしているくらいだからである。とすると彼女らの自発的行為ということになり、なれば利休と秀長や北政所らとの関係から考えて、利休についても同様に執り成しがなされているはずであり、当然赦免されていたことになるのではないか。しかしそうはなっていないが、その理由は何か。つまり赦免と切腹の差は何であったのかの問題である。

その差は史料に見る限り罪状の相違しかないし、またあってはならないはずである。したがって木像安置だけに関していうなら、長老衆と利休は少なくとも共同正犯になるはずである。しかしこの点も前述したとおり、利休が生涯の師として敬愛して已まなかった古溪に、たとえ三門の大改築を寄進したからといって、自分の方からそれを後世に伝えるため、己の木像を安置し

てほしいなどと請うたであろうか。それは大徳寺と利休の関係、あるいは利休の人となりなどから考えて、あり得ないことである。

従ってこれはやはり、寺側の謝意を表するための主体的行為であったことになり、すると利休は従犯ということになる。とすると、主犯である長老衆が赦免され、従犯である利休が切腹というのではあまりにも不整合でありはしないか。

2. 売僧行為罪とはそれほどの重罪か

このように処罰が逆転した差には、罪状で見る限り茶道具鑑定・売買の不正（売僧行為）という加重罪があるだけであり、その差が切腹であったということになる。するとこの売僧行為罪はよほどの重罪ということになる。

ところが茶道具の鑑定・売買・斡旋は商行為であり、たとえ利休が堺商人出身でなくとも、売買益を得たり、鑑定・斡旋に対価を要求するのは、正当な行為である。だから前述したように前稿 20 頁の〈史料Ⅲ-9〉「茶道要録」では、利休の評価した茶道具が、彼の死後も珍重されるのは、利休の鑑定・売買に私曲がなかった故であると記しているのであろう。このように、この問題については多くの議論をするまでもないことである。つまり、正当な商行為が加重罪として、それが生死を別つ結果に至らしめることになったが、それには讒言が大きく影響したからだ、と江戸時代の利休と接点のあった人々には信じられていたのも、そのためだからであろう。

Ⅳ 利休切腹の真相解明に向けて

第1節 秀吉に利休切腹命令を決断させた裏に隠された側近官僚の思惑

これまで述べてきたごとく、木像安置と問題発生の時期的ずれ、というよりむしろ、一旦内諾を与えながら、翻意してまでそれを不敬罪として問題としたことや、木像安置不敬罪についての大徳寺長老衆の赦免と、利休の切腹との処断における不整合がありながら、そして売僧行為はさして重罪ではないにもかかわらず、なぜ秀吉は利休の切腹を命令したのであろうか。つまり、二件の公示罪状はいずれも口実に過ぎなかったものであり、また利休娘の一件

も、これまで述べてきたとおり、真の原因ではなかったのであるから、一体如何なる理由で秀吉は利休に切腹を命じたのであろうか。秀吉は前田玄以来を信頼するあまり、こうした矛盾に全く気づかず、彼らの巧言にのせられ讒言を信じたが故に、誤って切腹させてしまったのであろうか。実はそうではなかったと思われるのである。

まず結論を先にいうと、前稿33頁の「切腹原因に関する基本的な視点」の項で概略を述べたように、石田三成を含めた側近官僚たちが、密かに練り上げた策謀によって、かれらの筋書きどおりに、秀吉に利休切腹を命令させたのではないかと考えられるのである。つまり、かれらの策謀は二段構えであった。だから前記の矛盾点については、秀吉から指摘される前に、それが世間を欺くための口実であると彼らから秀吉に伝え、承知していたが、そのうえで秀吉は、彼らが利休を切腹させる必要がある真の理由として密かに伝えた偽情報に踊らされ、切腹を命じてしまったのではないかとと思われるのである。

すると、ではいったい、その時秀吉が信じ踊らされるほどの重大な情報が、あり得たのだろうか。それについては、次のように考えられるのではないか。つまりそれは朝鮮出兵に関する、諸大名の思惑・動向であった。その前年天正18年には、懸案であった小田原北條氏を降し、徳川家康を関東に封じることのできた秀吉にとって、唯一残る国内問題の奥州伊達政宗の仕置きも、この月、天正19年2月4日の政宗上洛を見て決着した。もはや秀吉マターの国内問題は存在しなかったのである。しかし秀吉には、元主君信長のDNAを受け継いだとしか筆者には考えられない、生涯最大・最後の夢である、唐・天竺の制覇が残っていた。ところがこの件についての諸大名の気持ちはどうであったであろうか。一部の大名の中には、秀吉の無敗神話を信じ、あるいは領土的野心から期待していたとも言われるが、多くの大名は一連の天下統一戦にかなり疲弊しており、また「鉢植大名」化による相次ぐ移封により、この辺でちょっと一息つきたいというのが本音ではなかったろうか。前稿17頁の〈史料Ⅲ-2〉で取り上げた『武功夜話』には別の箇所に、弟秀長が晩年最も

心配していたのが、秀吉の高麗国征伐などという暴挙だった旨記されていることが、なによりの証拠である⁴³⁾。だからこそ、そうした諸大名の思惑や動向について、秀吉は逆に最も過敏になっていたであろう。

政宗が上洛の途についたとの報を得た秀吉は、閏正月 11 日には京を立ち、尾張清洲に鷹狩に出かける。英気を養い、いよいよ生涯最後の夢実現のプランを練るためであったものと考えられる。そうした秀吉にとってその夢の実現を阻む障害要因は、万難を排しても取り除くべき対象であったろう。そしてその秀吉の心境を最もよく知り、またそのための具体的対策を推進すべき立場にあった人物は、秀吉側近中の側近、官僚群の中でもこの人なりといわれた石田三成だったのではなかろうか。

石田三成は、利休が大納言秀長の厚い信頼を笠に着て、頭越しに諸大名の情報などを秀吉に伝えるばかりか、政治問題にも介入して進言したりすることを最も憎んでいた。そして彼は秀吉の最も信頼する有能な官僚でもあった。その三成にとって、千載一遇のチャンスがやってきた。この年正月 22 日、その秀長が死去したのである。秀吉に次ぐ実力者であり、三成にとっては目の上の瘤であった秀長は、利休の最大の理解者・擁護者でもあったからである。今や強大な後ろ盾を失った利休を抹殺することなど、わずか 19 万石の大名とはいえ、関ヶ原で一時は家康を震撼させたほどの三成にとっては、まさに「赤子の手をねじる」に等しいことであつたろう。かねてより前田玄白から、利休の大徳寺三門楼上木像安置や茶道具鑑定・売買をめぐる噂などを聞いていた三成は、秀吉の尾張鷹狩下向不在中の京で、伊達政宗問題や利休抹殺計画について、彼らと密議を凝らしたに違いないものと推測される。

第 2 節 伊達政宗上洛の経緯

利休切腹問題には、伊達政宗上洛問題が絡んでいると筆者は考えているので、話は少々遡るが、政宗上洛に至る経過について、簡単に『史料総覧』から該当条を以下に記す。

<史料Ⅳ-1>東京大学史料編纂所編『史料総覧』巻十二・桃山時代之二⁴⁴⁾。

天正十八年八月

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その２）

一日、徳川家康、江戸城ニ入ル、

六日、秀吉、陸奥白河ニ著ス、（後略）

九日、秀吉、陸奥会津ノ黒川城ニ入ル、尋デ、大崎義隆、葛西晴信、石川昭光、白河義親ノ、相模小田原ニ參陣セザルヲ責メテ、其邑ヲ没収シ、義隆、晴信ノ邑ヲ木村吉清、同清久父子ニ与ヘ、伊勢松坂ノ蒲生氏郷ヲ会津ニ封ズ、又陸奥ヲ檢地セントシ、片桐直倫^且元等ニ其條規ヲ与フ、

十二日、秀吉、陸奥黒川城ヲ発ス、尋デ、下野宇都宮ヲ経テ駿河ニ旋ル、

廿二日、秀吉、駿府ニ小西行長、森吉成ヲ招キ、明国出兵ノ準備ヲ議ス、是日、山中長俊、之ヲ増田長盛ニ報ズ、

九月

一日、秀吉、京都ニ凱旋ス、

十月

十六日、陸奥大崎、葛西両氏ノ遺臣等、木村吉清父子ノ非道ヲ憤リ、是日、一揆ヲ起シ、之ヲ囲ム、（後略）

十一月

十五日、蒲生氏郷、讒言ヲ信ジ、伊達政宗ノ異心アルヲ疑ヒ、兵ヲ進メ、明日、陸奥名生城ヲ攻略シテ、之ニ抛ル、政宗、同国宮沢城ヲ攻メテ、克タズ、

十六日、伊達政宗、小関重安ヲ江戸ニ遣シ、鷹ヲ徳川家康ニ贈リ、其移封ヲ賀ス、

廿四日、蒲生氏郷、秀吉ニ伊達政宗ノ異心アルコトヲ注進ス、

廿六日、蒲生氏郷、木村吉清、浅野正勝ノ弁明ヲ聞キ、伊達政宗ニ対シ、意稍解ク、是日、之ヲ秀吉ニ報ジ、又政宗ニ告グ、

廿八日、蒲生氏郷、伊達政宗ト誓約ス、

浅野長吉^{長政}、中村一氏ニ、伊達政宗ノ異心アルヲ報ジ、徳川家康ト議リ、来援センコトヲ請フ、

十二月

十五日、秀吉、蒲生氏郷ノ報ニ依リ、徳川家康及ビ羽柴秀次ヲシテ、之ヲ救援セシム、尋デ、氏郷ノ誤報ヲ怒リ、家康等ヲ途ニ召還ス、（後略）

廿四日、徳川家康、伊達政宗ノ鷹ヲ贈ルヲ謝ス、

天正十九年正月

二日、千宗易利休、陸奥二本松滞陣ノ長岡忠興ノ老臣松井康之ニ答ヘ、同国ノ一揆ニ就キテノ秀吉ノ対策等ヲ報ズ、

十日、是ヨリ先、石田三成、秀吉ノ命ニ依リ、陸奥ニ下向シ、是日、相馬ニ著ス、蒲生氏郷ノ、同国名生城ヲ出ルヲ聞キテ帰京ス、

十二日、徳川家康、伊達政宗ニ、速ニ上京センコトヲ勸ム、

十三日、徳川家康、陸奥ニ出陣スルヲ停メ、武蔵岩槻ヨリ江戸ニ帰ル、

廿二日、権大納言従二位羽柴秀長薨ズ、養子秀保嗣グ、

廿六日、蒲生氏郷、陸奥会津ヲ発シ、是日、同国二本松ニ至リテ、浅野長吉長政ニ会ス、尋デ、
上京ス、

三十日、伊達政宗、上京セントシ、出羽米沢ヲ発ス、

閏正月

三日、徳川家康、上京セントシ、江戸ヲ発ス、

十日、秀吉、尾張清洲ニ遊獵ス⁴⁵⁾、

廿二日、徳川家康、入京ス、

廿七日、伊達政宗、尾張清洲ニ著ス、是日、秀吉、之ヲ引見ス、

二月

三日、秀吉、尾張清洲ヨリ帰京ス、

四日、伊達政宗、京都ニ入り、妙覚寺ニ館ス、

このように、小田原北條問題を三成らの推す強硬策で終息させた秀吉は、引き続き奥州白河に入り、天正18年8月9日には会津黒川城にて、奥羽諸大名の仕置きを完了し、9月1日帰京した。ところが、新しく木村吉清・清久父子に与えた奥州の旧大崎・葛西領の遺臣・百姓らが、10月16日新領主に対し蜂起する。そしてこの一揆をめぐり、これに政宗が同心しているとの誤った報告が、奥州の押えとして新しく会津に封じられていた蒲生氏郷から伝えられるに及び、「政宗謀叛」として、年末年始にかけ秀吉政権を一気に緊迫させる。

こうした政宗不信が高まる中で、上記『史料綜覧』記述の天正19年正月2日付の利休から松井康之に宛てた書状で、3月1日の秀吉出陣が決定された旨報じられる。それには強硬派三成の関与するところ大であったであろう。その一方家康を中心とする宥和路線派の動きも活発で、彼らは密かに、政宗が上洛して秀吉へ臣従することをすすめていた。こうした中で秀吉は家康および羽柴秀次に奥州出陣を命ずるとともに、三成にも奥州下向を命じた。その三成は天正19年正月10日相馬に入る。

この政宗にとっての土壇場に及び、家康は天正19年正月12日付政宗本人

宛書状⁴⁶⁾に、秀吉の政宗に対する最後通牒ともいえる朱印状を同封して、一刻も速やかに上洛するよう促す。そしてその書状で家康は、事の成り行きは浅野弾正長吉と自分に一任されたい、と政宗に保証している。さらに浅野長吉からも、上洛が延引すれば厄介なことになり、家臣たちに相談しては埒が明かないと、秀吉の朱印状の件にも触れながら、一日片時も早く上洛するように、との正月21日付の政宗宛書状⁴⁷⁾を携えた急使が来る。こうした家康・浅野長吉などの強いすすめにより、政宗はやっと上洛の腹を固め、正月晦日に米沢城を出発することを決定する。そのことは浅野長吉から政宗に宛てた、天正19年正月26日付返書で確認できる⁴⁸⁾。そして翌閏正月12日には岩付に着くが、三成も政宗の上洛を聞いて京へ引き返す途上でその地に入っていた旨知ることになる⁴⁹⁾。三成にしてみれば、家康らの暗躍により武力征圧がかなわず、政宗が上洛するとの情報により、急ぎ上洛中であったものと思われる。

政宗はやがて、秀吉の差し向けた浅野長吉の長男幸長と同道して、秀吉が鷹狩に來ている清洲に入る。そして早速家康に手紙を送り、到着を告げる⁵⁰⁾。家康はこれに対して閏正月26日付返書⁵¹⁾で、秀吉御前の儀は、少しも変わった様子はないのでご安心を、と知らせる。そして翌27日政宗は秀吉に祇候するが、このときの秀吉はすこぶる上機嫌で、歓待したという⁵²⁾。清洲で政宗を引見した秀吉は、翌月2月3日帰洛し、それを家康父子が出迎えるが、その翌日4日には政宗も一千人余の軍勢を従え入洛する。家康よりかねてから政宗上洛を予告され、また2月4日の白河への出迎えも指示されていた⁵³⁾利休は、古田織部からこの日来駕ありたしとの手紙を受け、はたと困ってしまう。そこで政宗出迎えの用がすっかり済んで参上できるのは、夜になってからになると思われる旨の手紙を織部に出す⁵⁴⁾。その上で利休は政宗を白河に迎え、政宗に随伴して宿所に指定された妙覚寺に入る。

秀吉政権にとっての国内問題最後の懸案も、こうして何事もなく政宗が上洛し、秀吉に膝を屈することで決着し、京洛の巷は平和の訪れを予感し安堵する。しかしその裏では、利休の身辺に刻々と危機が迫っていたのである。

第3節 伊達政宗上洛後の豊臣政権の動き—利休切腹の意味するもの

秀吉不在中の前月 20 日頃から俄に、大徳寺三門楼上に安置された利休の木像が問題化されることになる。小松茂美『利休の死』³⁵⁾により、2月4日の政宗上洛後の利休周辺の事態について、その主旨を要約すると、次のように展開されていく。

利休にはその日から、政宗接待という新たな仕事が待ち受けていた。政宗は宿所に指定された妙覚寺境内に、にわか造りの茶室を造り、連日の訪客のために茶を点ててもてなしていた。しかし茶の饗応といえは、かねてから政宗がその指南を熱望していた利休の存在無しには考えられず、利休が妙覚寺の茶室に張り付いていた様子は、想像にたかくないという。そして政宗上洛に一役買った家康も、これまた妙覚寺の山門をしばしばくぐり、政宗との面談に時を移したことで、これまた自然のなりゆきであったに違いない。ここに政宗を交えて、家康と利休という鼎談の場が度々もたれたのも、隠れのない事実ではなかったか。その妙覚寺は聚楽第の東北すぐ近くにあり、聚楽第の櫓からは視野のうちにある。家康介入による政宗宥恕を快しとしない三成は、家康・利休の妙覚寺への出入りを監視しながら、それを逐一秀吉に報告し、事によったら、お三方で何か密計でも、一と耳元にささやくことを忘れなかった、という。そして突然 2月13日の利休堺追放となるのである。

小松茂美『利休の死』のこうした趣旨の記述には、個々に史料が示されている訳ではないので、一見フィクションとも思われるかもしれないが、筆者はそれが仮に推測だとしても、当を得たものと確信している。それが、筆者が考えている、利休切腹の真相の序章としての情景を、的確に描いていると思われるからである。

つまり、話はまた少々遡るが、前記の政宗上洛に至る経過を見てもらいたい。前年 8 月 9 日、秀吉は会津黒川城で奥羽の仕置きを完了し、同月 12 日、意気揚々と帰洛の途につく。その途上秀吉は、22 日に駿府で、小西行長・森吉成を招き、明国出兵の準備を議している。全国平定を完了した秀吉は、早くも次なる目標である生涯最大の夢、唐・天竺の制覇を、具体的に検討し始めるのである。ところが前記の 10 月 16 日の奥州の旧大崎・葛西領の遺臣らの一揆と、政宗加担という誤報に、秀吉は 3 月 1 日奥州出陣を決定し、念願の朝鮮出兵は延期せざるを得ないかという事態に至る。秀吉にとってはさぞ

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

かし残念なことであったであろう。ところが、その政宗が秀吉の前に膝を屈し、上洛してくることになったのである。その報を得た秀吉は、今度こそいよいよ朝鮮出兵の実現を信じ、その想を練るため、尾張清洲での鷹野に発ったのであろう。したがって、その時の秀吉の心境は、まず朝鮮・明国征服ありきで、これが完了すれば、家康なども心底から完全に、自分に平伏するに違いない、あるいは、なお屈しないようであれば、その時処分すればよい。だから今は、とにかく波風を立てず、奥羽問題は処理したい、というものだったのではなかろうか。

秀吉のその気持ち、決死の覚悟で上洛した政宗を、過剰なまでに遇することにあらわれている。こうした情勢の一端が次の書状でうかがえる。

＜史料Ⅳ-2＞「伊達家文書之二」第五八七号文書（天正19年2月29日付鈴木新兵衛書状）⁵⁶⁾。

貴札拝見、過当之至奉存候、^{（政宗）} 隨而^屋 形様今般御仕合、万々如御存念候、（後略）

一 今度之御上洛、さり共大事之境にて候処ニ、不移時日御登之儀、無比類之由、日本之諸侍、京中僧俗町人以下迄も、感申儀不及是非候、於武功天下ニ無双由、褒美申候事不尋常候、聞召千里之外ニも心ちよく、御大慶たるべく候事奉察候、

一 御屋敷被遣、剩浅野左^{（幸長）} 京大 夫様ニ被仰付、若狭之衆三千人計にて、唯今御普請専候、（後略）

一 諸侍京中より進上捧物、日々夜々不知其数候、于今無止事候、如此之御出頭、以前安芸^{（輝元）} 毛利 殿上洛以来、無之由風聞候、少々それにも過候べく候由、其唱にて候、（後略）

この書状は、前稿5頁で取り上げた＜史料Ⅱ-5＞の、利休の切腹を国元の伊達家の重臣に報じた書状の、前半部分である。これによると、あるいは討死もという覚悟であった政宗が、過剰なもてなしに舞い上がっている様子や、もしやまた戦か、と政宗の去就に息を凝らしていた諸大名も、ほんと胸を撫で下ろしている状態が、手に取るようにわかるようである。このように、政宗の一千名の精鋭を擁した上洛は、諸大名・京中の僧俗町人にとっては、さぞかし緊迫したものであったに違いない。

しかしこのとき秀吉は、これで即朝鮮出兵ができると、手放しに喜んでいたのではないと思われる。彼の優秀なスタッフをして、「反朝鮮出兵」の動き

がないか、もしあるとすれば未然にそれを封じるべく、万全の情報網を張りめぐらせていたことであろう。そして事態は、利休が上洛直後の政宗や、家康らとの妙覚寺での茶会に臨んでいたこと、そしてそれが密かに監視されていたという状況から、2月13日の利休の堺追放、そして26日の京都召喚へと急転するのである。ここで前記第Ⅱ章第3節の、「切腹直前の利休屋敷の嚴重警固」という特異事象を思い出してもらいたい。

それは利休懇意の大名による利休奪還を恐れての警戒などではなく、妙覚寺で内密に行われていると看做されていた、家康・政宗・利休の鼎談に対するメッセージだったのではない。つまり、秀吉の朝鮮出兵計画に対する、秀吉側近官僚に捏造された「反出兵クーデター計画」に対しての、察知済であるという秀吉のメッセージであり、断固たる処置も辞さずという警告としての措置だったと考えられるのである。もっと正確に言えば、妙覚寺での鼎談が、「反朝鮮出兵」の密談である、と注進に及んだ三成・玄以外の情報に接した秀吉が、不穏な企ては察知済である、というメッセージのために必要な措置として忠臣たちが進言した、利休屋敷の嚴重警固という策に、踊らされた結果だったのではなからうか。

伊達政宗を上洛させ、秀吉の宥恕を得るために暗躍し、政宗を懐柔した家康の動きについての、三成らからの情報・進言に、疑念を深めていた秀吉にとっては、上洛し膝を屈したとはいえ、政宗および彼の従える一千の精鋭および家康の存在は、いかにも不気味な存在であったに違いない。そのためにこそ三千名もの軍の動員による警告メッセージが必要だったのではない。秀吉が内心ひそかに一目をおく家康と、奥州の若き風雲児と言われた政宗の同心による反朝鮮出兵の動きは、何としても阻止する必要があった。しかし、今はそれを表立って咎め立てしたり、処罰することはできない。いずれ機をみて処分するとしても、今すれば大名たちの間に、自分も疑われているのではないかとの疑心暗鬼が生じ、その結果秀吉政権は一気に不安定化し、朝鮮出兵どころではなくなるからである。

しかし、未然防止の策はあった。それは無謀な企ては察知済であるという

メッセージや、そのための備えは出来ており、若し実行すれば断固処断するという警告の発令である。このように考える以外に、朝鮮出兵・唐天竺制覇という大望の実現を目前にした天下人秀吉が、たとえ天下一名人とは言え、一介の茶人の屋敷を、三千名という大軍で警固させた特異性が説明できないのである。そしてまたそのための生け贄が利休だったのではないか。利休屋敷の異常警固に見せた、「無謀な企ての察知」というメッセージであり、「利休の獄門」という警告であったに違いない。利休の茶会は彼らの密談の場であり、利休は反朝鮮出兵派大名をつなぐパイプ役であると見られたのであろう。というより、そのように三成らによって仕立て上げられ、そのように秀吉に吹き込まれ、そのように信じさせられたのであろう。

本当に反朝鮮出兵の動きがあったかどうかは、判らない。しかし少なくとも秀吉がそれを恐れていたか、あるいは恐れさせられていたことは、たかが茶坊主一人に三千名の軍を動員したことで証明されるであろう。従ってこの絶好の機会に乗じて、邪魔で仕方のなかった利休を抹殺し、クーデターの未然防止という勲功を立てた、と秀吉に信じさせた三成は、「一石二鳥」の成果にほくそ笑んだことであろう。

第4節 利休抹殺と順調な朝鮮出兵そして秀吉の後悔

最後に、ではなぜ利休が生け贄にされたかについて、再度確認しておく必要がある。前田玄以や木下祐桂に憎まれた理由はすでに簡単に説明したが、問題は三成である。政宗上洛後の妙覚寺の家康・政宗・利休の密談の真偽のほどは不明である。しかし、秀吉政権内の権力構造については、大政所・北政所・秀長・利休などのグループと、淀殿・石田三成・前田玄以・増田長盛などのグループとの対立が、鶴松君誕生後とくに顕在化した、と多くの歴史家が指摘している。また、三成と利休の対立についても、京の人々の間でも噂されていたらしいことが、利休の切腹後ではあるが、次の記録からも見て取れるのである。

＜史料Ⅳ－3＞神祇大副吉田兼見日記『兼見卿記』巻十六、天正19年3月8日条⁵⁷⁾。

八日、甲戌、(中略)今日宗易女同息女、於石田治部小輔、強問蛇責仕之由、其沙汰也、母当座ニ絶死、次息女同前云々、

また、前稿6頁の<史料Ⅱ-11・14>でもみたように、切腹した利休の首を、一條戻橋で木像の足で踏みつけて獄門に晒したという処置を、石田三成がやったという記述が、木像安置不敬罪を捏造し、その罪を表向き口実で処断するよう、秀吉に進言した陰謀の黒幕が、石田三成であったことを推測させる、傍証になるのではないだろうか。

いずれにしても、利休は巧妙に仕立てられた陰謀の、筋書きどおりに抹殺されるが、それを命じた天下人秀吉もまた、三成らの進言によるクーデター未然防止で、朝鮮出兵が順調にスタートしたことに、胸を撫で下ろしたことであろう。しかし、諸大名の表立った反対もなく、あまりにも順調に出兵できたことに、あるいは拍子抜けというか、ある種の不審・疑念といった割り切れない気持ちを、利休を切腹させた後になって抱くようになっていたのではないだろうか。それが前記第Ⅱ章第5節で述べた、利休切腹に関する江戸時代の史料上にみえる秀吉の後悔という記述となって、残されることになったのではないだろうか。そして更に、下記に示す秀吉自身による、まるで利休の死を惜んでいるかのような、利休を懐かしんでいることを示す記述や書状となって、残っているのではないだろうか。

<史料Ⅳ-4>神屋宗湛「宗湛日記」天正20年10月晦日の条⁵⁸⁾。

(前略)

一 御茶ノ時ハ如常 御座ニテ候。御機嫌能候テ、種々御雑談トモ被成候、此一軸ニ付テ、床ヲ仕替候ヘトノ 御諒有リ、此ヤウナル指南ハ、宗易モ宗及モ云テハキカセマシイソト、御意也、忝ト申上候也、(後略)

<史料Ⅳ-5>「豊太閤真蹟」第三一号、天正20年5月6日付天瑞院侍女宰相宛消息⁵⁹⁾。

かへすかへす、一たんとそくさい、きのふ、りきうのちやにて、御せんもあかり、おもしろく、めてたく候まゝ、御心やすく候へく候。(後略)

<史料Ⅳ-6>「豊太閤真蹟」第一三六号、文禄元年12月11日付民部法印前田玄以宛消息⁶⁰⁾。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

（前略）ふしみのふしんの事、りきうにこのませ候て、ねんころに申つたく候。以上。

上記のように、「宗湛日記」では、朝鮮出兵の前線基地である肥前名護屋城にあった秀吉が、博多の神屋宗湛の茶会で、その床飾りについて、宗湛に注意し、仕替えをさせている場面である。その時、今は亡き宗易や宗及に比較して宗湛の茶心の欠如について、叱っているのである。また、「豊太閤真蹟」第三一号は、やはり肥前名護屋にいた秀吉が、京の聚楽第にいた母の大政所に対して送った手紙である。ここでも前年に切腹させた利休を思い出し、利休流の茶で御膳を上がっているのも、一段と息災であり、安心してほしいと知らせているのである。そして、「豊太閤真蹟」第一三六号は、これも同じく肥前名護屋在陣中の秀吉が、折りしも普請中の伏見城のことで、利休流の数寄風流を尽してやるように、京都所司代前田玄以に命じているものである。

このように上記3点の文書は、秀吉が朝鮮出兵を急ぐあまり、不用意に利休を切腹させてしまい、その追慕の情で、ついその本心の一端を垣間見せたもの、と言えるのではないだろうか。

いずれにしても、まさにその時点が、豊臣政権にとっての最盛期にあったことは事実であり、そこから瓦解への道をたどることになるのである。異能をもち、時には異見をも言ってくれる、数少ない側近であった利休の処分は、その第一歩であったと言えるのではないだろうか。

V 結び

「御茶湯御政道」という、茶湯の経済性・政治性を創造した、主君織田信長の亡き後をうけた豊臣秀吉は、この「御茶湯御政道」という具を一層駆使しながら、名実ともに天下人となる。そこにはたえず、有能な後見役の利休の存在があった。

しかし、日本全国の平定を終えた秀吉は、生涯の大望であった、唐・天竺の制覇という夢の実現にとりつかれる。それまでの天下統一の過程で重要視してきた、茶湯の政治・経済・文化面における効用も、すでに彼の頭の中では、片隅に追いやられたかの感があった。

その秀吉の心の隙間を衝くかの如くもたらされたのが、秀吉が万難を排しても実現すべく取り組んでいた、朝鮮出兵についての利休の不穏な動き、という偽情報だったのではないだろうか。秀吉は信頼する有能な部下の進言に、つい迂闊にもものせられて、利休を切腹させてしまい、後悔する破目に陥ることになったのではないだろうか。

これまで、利休が切腹させられるに至った真相については、多くの研究がなされ、発表されている。しかしそのいずれも、事件当時の安土桃山時代からその後の江戸時代の間に記録された、切腹の状況ならびに切腹原因に関する史料の、断片的な記述によった観念的考察によるものであったと思われる。

そこで筆者は、その間に記された、できるだけ多くの原典史料を丹念に精査するところから、その真相を解明しようとしたものである。その結果、その核心部にかなりの程度接近し得たのではないかと考える。しかしながら、時間的制約や史料収集の困難性などから、今後の研究課題として残さざるを得なかった部分もある。

今後下記の研究課題に取り組むことで、より完成度の高い内容のものにしたいと考える。第一に、今後さらに、利休切腹に関する史料の発掘などに努力することで、本論の精度をたかめることである。第二に、秀吉による利休処断という決断には、「朝鮮出兵に関して利休に不穏な動きあり」という偽情報にのせられた可能性が強いところから、秀吉の朝鮮出兵の理由とその経緯、ならびに対徳川家康コンプレックスについて、さらに深く考察することで、当時の政治背景を具体的に解明することである。第三に、豊臣政権の政治メカニズム、歴史的な位置付けを踏まえて考察することである。そして第四に、利休伝説の生成と展開という視点に立って、原典史料の再分析・検討を加えることである。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

注

- 1) この聚光院三門とあるのは誤りと思われる。聚光院は大徳寺山内の一塔頭であり、小門があるのみで、三門といえるものは無い。
- 2) 吉田蒼生雄訳『武功夜話』第三卷、新人物往来社、1987年、176～178頁。
- 3) 佐藤進一他編『中世法制史料集』第一卷、鎌倉幕府法、岩波書店、1955年、3～4頁。
- 4) 同上、『中世法制史料集』第三卷、武家家法I、岩波書店、1965年、135～136頁。
- 5) 同上、『中世法制史料集』第三卷、259頁。
- 6) 同上、『中世法制史料集』第三卷、317頁。
- 7) 東京大学史料編纂所編『史料総覧』卷十二、桃山時代之二、東京大学出版会、1953年、296・298・300頁。
- 8) 近藤瓶城編『改定史籍集覧』第五冊、臨川書店、1983年、217頁。
- 9) 辻善之助編『多聞院日記』第四卷、角川書店、1967年、246頁。
- 10) この記述は天正18年7月10日の条であるから、その前夜とは7月9日となるが、氏政・氏照の切腹は他の史料からも7月11日であり、誤記である。というより、小田原における切腹の報は、奈良まで来るにはどんなに早くても翌々日以後になると考えられるから、この日記の記述は、関白秀吉が弟の大和大納言秀長へ宛てた書状で、小田原城落城と、氏政・氏照に切腹を命じた件を報じたのを仄聞し、記録したものと考えられる。また、同様に氏直の弟陸奥守となっているが、陸奥守氏照は氏政の舎弟であり、これも伝聞による誤りであろう。
- 11) 近藤瓶城編『改定史籍集覧』第十九冊、臨川書店、1984年、105頁。
- 12) この7月12日も、前記同様誤認によると思われる記述である。また、氏直の死はこのときではなく、天正19年11月4日没が通説である。
- 13) 檜谷昭彦・江本裕校注『太閤記』新日本古典文学大系60、岩波書店、1996年、337～338頁。
- 14) 「十日之晩」切腹というのは誤りで、11日である。氏政・氏照および大道寺・松田の4名については、11日切腹との7月5日付けの氏直宛秀吉朱印状に記されているとのことである。
- 15) 竹内理三編『増補続史料大成』第九卷、臨川書店、1967年、251頁。（ただし、原典は毛筆書きである。）
- 16) 前掲注9の『多聞院日記』第四卷、194頁。
- 17) 田端泰子「豊臣政権の人質・人質政策と北政所」女性歴史文化研究所『女性歴史文化研究所紀要』第15号、2006年、104頁。
- 18) 横田冬彦「豊臣政権と首都」日本史研究会編『豊臣秀吉と京都』文理閣、2001年、25

～26 頁。

- 19) 小和田哲男『城と秀吉』角川書店、1996 年、108～110 頁。
- 20) 同上、113 頁所載。
- 21) 同上、117 頁所載。
- 22) 前掲注 15 の『増補続史料大成』第九卷、320～321 頁。(ただし、原典は毛筆書きである。)
- 23) 同上、『増補続史料大成』第九卷、322～323 頁。(ただし、原典は毛筆書きである。)
- 24) 小松茂美『利休の死』中央公論社、1988 年、166～167 頁。
- 25) 小峯和明校注『今昔物語集』四、新日本古典文学大系 36、岩波書店、1994 年、258～261 頁。
- 26) 森正人校注『今昔物語集』五、新日本古典文学大系 37、岩波書店、1996 年、109～113 頁。
- 27) 「今昔物語集」巻第二十七、第十四話「のぼるひと おににあふこと従東国 上人、値 鬼語」の条、同上『今昔物語集』五、113～114 頁。
- 28) 西尾光一校注『撰集抄』岩波書店、1970 年、209～210 頁。
- 29) 池上洵一校注『今昔物語集』三、新日本古典文学大系 35、岩波書店、1993 年、554～557 頁。
- 30) 近藤瓶城編『改定史籍集覧』編外三、臨川書店、1984 年、426～427 頁。
- 31) 佐藤謙三・春田宣編『屋代本平家物語』下巻、桜楓社、1973 年、544～548 頁。
- 32) 野間光辰編『新修京都叢書』第六卷、臨川書店、1967 年、30～31 頁。
- 33) 藤田達生『秀吉神話をくつがえす』講談社、2007 年、242～243 頁。
- 34) 同上、243 頁重引。および小林清治『豊臣権力の形成』東京大學出版会、1994 年、55～56 頁。
- 35) 松山吟松庵校註『茶道四祖伝書』思文閣、1974 年、242 頁。
- 36) 千宗左・千宗室・千宗守監修『利休大事典』淡交社、1989 年、657 頁。
- 37) 同上、『利休大事典』、667 頁。
- 38) 同上、『利休大事典』、655～656 頁。
- 39) 梅原猛・岸信宏『古寺巡礼。京都・知恩院』淡交社、1977 年、68・105～109 頁。
- 40) 国史大系編修会編『新訂増補国史大系』第三十九巻・徳川実紀第二篇、吉川弘文館、1964 年、176 頁。
- 41) 佛教大学編『京都の歴史 3』京都新聞社、1994 年、143～145 頁。
- 42) 佐和隆研他編『京都大事典』淡交社、1984 年、404 頁。
- 43) 前掲注 2 の『武功夜話』第三巻、176・185 頁。
- 44) 前掲注 7 の『史料綜覧』巻十二・桃山時代之二、303～325 頁。

千利休の切腹の状況および原因に関する一考察（その2）

- 45) 『伊達政宗記録事蹟考記』 十一, 天正十九年閏正月十九日条では, 「関白様ハ十一日京ヲ御立尾州ヘ御鷹野ニ御下向」(東京大學史料編纂所データベースの画像より翻刻) となっている。(ただし, 原典は毛筆書きである。)
- 46) 「伊達家文書之二」第五七四号文書, 東京大學史料編纂所編『大日本古文書』家わけ第三, 東京大學出版会, 1908 年, 67 頁。
- 47) 同上, 「伊達家文書之二」第五七八号文書, 同上, 『大日本古文書』家わけ第三, 71 頁。
- 48) 同上, 「伊達家文書之二」第五八〇号文書, 同上, 『大日本古文書』家わけ第三, 72 ~73 頁。
- 49) 同上, 「伊達家文書之二」第五八二号文書, 同上, 『大日本古文書』家わけ第三, 74 ~75 頁。
- 50) 前掲注 24 の小松茂美『利休の死』, 138 頁。
- 51) 前掲注 46 の「伊達家文書之二」第五八四号文書, 同上, 『大日本古文書』家わけ第三, 75~76 頁。
- 52) 前掲注 24 の小松茂美『利休の死』, 139 頁。
- 53) 同上, 143 頁。(ただし, 小松氏は家康が利休に, 伊達政宗を出迎えるよう指示した, という根拠は示していない。)
- 54) 小松茂美『利休の手紙』所収 152 号文書, 小学館, 1985 年, 176 頁。
- 55) 前掲注 24 の小松茂美『利休の死』, 165~168 頁。
- 56) 前掲注 46 の『大日本古文書』家わけ第三, 79~81 頁。
- 57) 東京大學史料編纂所データベースの画像より翻刻。(ただし, 原典は毛筆書きである。)
- 58) 千宗室代表編纂『茶道古典全集』第六卷, 淡交新社, 1958 年, 270~271 頁。
- 59) 東京大學史料編纂所編『豊太閤真蹟集』上 所収 31 号文書, 東京大學史料編纂所, 1938 年。(ただし, この文書は, 秀吉の手書き毛筆の写真本であるため, 前掲注 24 の小松茂美『利休の死』の 310 頁の翻刻によったが, なおその翻刻文も, 原典では紙面の関係で, 秀吉が各行間に後から追加書きしていて判りにくいので, 筆者により, 実際に書かれた順に載せたものである。)
- 60) 同上, 『豊太閤真蹟集』下 所収 136 号文書。(ただし書きは注 59 に基本的に同じであるが, この文書の翻刻文は, 小松茂美『利休の死』311 頁収載である。)

A Study of the Causes of Sen no Rikyu's Ritual Suicide

FUKUI Sachio

Sen no Rikyu (1522-1591) was one of the well-known founders of the traditional tea ceremony (*sado*) in medieval Japan. Toyotomi Hideyoshi (1537-1598) ordered Sen no Rikyu to commit ritual suicide (*seppuku*) in February, *Tensho 19* (1591), because he was the general who won the final victory in the military conflicts among the samurai and unified medieval Japan.

Various opinions have been offered concerning the reasons for Sen no Rikyu's death. However, no firm conclusion has yet been reached. The author has critically reviewed a large number of historical materials and theories regarding this episode to try to elucidate the truth.

The official announcement of the Toyotomi Hideyoshi regime gave as the principal reasons for Sen no Rikyu's punishment, his *lèse majesty* toward both General Toyotomi himself and the emperor, together with his unreasonable valuation and trade in tea-ceremony items. The *lèse majesty* charge also included his construction of an overly splendid gate to the Daitokuji Temple in Kyoto, and his order to place a wooden figure of himself on the gate.

However, the author has managed to locate many descriptions from sources about the circumstances of his death that differ quite considerably from information found in other cases of ritual suicides.

Especially, the author notes the following; (1) the strict guard of Rikyu's home by 3,000 soldiers before his death to prevent his being rescued by influ-

ential feudal lords (*daimyo*), and (2) the crucifixion of Rikyu's figure and exposure of his head at Ichijyo-Modoribashi Bridge, Kyoto. From these idiosyncratic materials, the author seeks to further elucidate the truth about the causes of Sen no Rikyu's *seppuku*.

The author infers the cause of Rikyu's death as follows. General Toyotomi Hideyoshi had planned to invade the Korean Peninsula after the unification of all Japan. Ishida Mitsunari, who was one of the most influential vassals of Hideyoshi, falsely told him that Rikyu had opposed the invasion, in collaboration with major influential feudal lords in East Japan, especially Tokugawa Ieyasu and Date Masamune, in a room for the tea ceremony. Hideyoshi was frightened by Mitsunari's slander, and got angry with Rikyu. Therefore, Hideyoshi ordered the *seppuku*, and these idiosyncratic matters concerning his death were a tacit warning to each feudal lord to collaborate in the invasion.

Keywords : Sen no Rikyu, tea ceremony, cause of ritual suicide,

Toyotomi Hideyoshi, invasion upon Korea